

おねえちゃんはミラクルガール・新世界より

プロローグ

けたたましいサイレンとともに消防車が集まってくる。燃えているのはこのビルだ。

窓の外から黒煙が上がり、ぼくらの足もとを灰色の煙が川のように流れている。ものが焼けるにおいがものすごい。

おねえちゃんとぼくは、前後左右に首をまわし、とりのこされているはずの子どもをさがした。

室内にはガラスの棚が立ち並び、人形とかぬいぐるみ、乗り物の模型がごちゃごちゃとかざられていた。ここはオモチャ屋さんだった。

「ウキーンッ！」

奇声を発して、おねえちゃんが倒れた。何かにけつまづいたらしい。

「何よこれっ！」

おねえちゃんが、おもちゃの消防車を投げ飛ばすと、かべにぶつかって、音をたてて落ちた。

そこに子どもはいた。何かをかかえて、かべぎわのみっこにうずくまっている。

「あ、見つけた見つけた。ケンジ、さつき窓から見えたのはこの子だよ。」

「まちがいないよ。おねえちゃん。」

「ほーら、恐くないからこっちおいで。」

おねえちゃんは、やさしそうにその子を手まねきしたが、うずくまってでてこない。

「おいでおいで。」

おねえちゃんの笑顔が張りついている。

サイレンの音は激しくなり、煙がだんだん濃くなって息が苦しくなってきた。

「ええい、めんどくさい、こっちやこんかい！」

本性を出したおねえちゃんは、子どもをむんずとつかみ引き寄せた。

カラカラカラと音がして、子どもの手から何か落ちた。

「ハーモニカ？」

おねえちゃんのスキをついて、その子は落とされたものにしがみついた。

しかたなく、おねえちゃんは、子どものからだにダイビングした。ぼくも続いて、おねえちゃんのからだにしがみついた。こうなつてはこのまま逃げるしかない。

「オーーーーーー……」

ぼくのくちから神聖な音が流れた。意識して出るのではない。自然に出てくるのだ。

「ハレー・クリシュナ・スタパティア・ハレー……、シッデイ・マハー・シッデイ！」

おねえちゃんの胸のペンダント、「カウストゥバ」が緑色に光った。おねえちゃんの欲にまみれた心が一瞬、無になり（なるらしい）、下から光に つつまれた。

タイツの上の九千八百円のスカートが黄色く光り、ロゴだらけの一万円なりのパーカーが白く、赤く、緑に明滅した。光は上昇し首のところで灰色、ケバいい顔を縦断してひたいでまた白くなり、イタリヤ帰りの美容師にカットしてもらった頭から光がふきだした。

その瞬間、まわりの空間がマール模様にくにやりと曲がり、流れるような感覚がして、気がついたときには、ぼくらは緑道の草の上に倒れていた。

「うーん。」

おねえちゃんとぼくは頭をさすった。「これ」をやる、と、しばらく地面がぐらぐらする。

「おねえちゃん、ここはどこ？」

「さあ。サイレンの音が聞こえるから、茶沢通りから離れてないと思うけど。」

木のむこうに、燃えているオモチャ屋のビルが見える。消防車の放水がはじまったようだ。じきに火は消えるだろう。

「ケンジー。あの子がいない。」

「えっ！」

おねえちゃんは、ぼけらつと座っている。

「ま、いいか。逃げ出せたのは確かだから、そのへんで迷子になつてんでしよう。」

「無責任なあ。」

「あにが無責任よお。危険をおかして火事の中で子どもを助けて、ほんとに割に合わないわ。何の得にもならないし、誰に感謝されるわけじゃない……」

うーむ。雲ゆきが怪しい。おねえちゃんのワガママがはじまるのだろうか。

「今日は三学期の試験が終わった日なのよ。」

「そうだね。」

「お祝いに、パパがごちそうしてくれるから、三軒茶屋にきてるのよ。」

「うん。」

「それなのに、火事の中に飛びこむのは、あんまりじゃない？」

「まあね。」

「でねー、ケンジー。」

おねえちゃんが、ケバいい顔の前で手を合わせた。

「三学期の成績がやばいのよー。何とかならないかなー。」

「何とかって……。試験はもう終わってるんじゃない？」

「だからさあ、通知表の数字だけ、ちよちよいのちよいと、こいつの力で……」

おねえちゃんは、胸の「カウストゥバ」をぶらぶらさせた。

「ダメ！ 絶対ダメ！ もう、くだらないこといってないで、パパと待ち合わせのお店に行こう。」

ぼくが立ち上がり、おねえちゃんも立ち上がると、緑道のむこう、大通りのほうから、誰かが歩いてくる。

セーラー服の女の子と、五、六才の子のふたり組だった。

奇妙なふたりだった。

中学生のほうは、おねえちゃんと同じ学校の制服じゃないだろうか。はつきりいって、おねえちゃんより美人だった。エキゾチックというのか、日本人ばなれした美しさで、それでいて、おねえちゃんみたいにケバくはない。あざやかな目から強い視線をはなっている。

もうひとり、これは女の子なんだろうか？ ワンピースを着ているが、これが女の子だとしたら、こんなみにくい子はめつたにいない。口をへの字に結んでしかめつづらをしてる。だが、その小さな子の服はあちこち

ススだらけで、顔も黒くよごれている。

「あ、そうか。」

ぼくとおねえちゃんは同時に声をあげた。

さつき助けた子はこの子なのだ。

世田谷のありふれた緑道のひとつで、おねえちゃんと謎の美少女、ぼくとススだらけの女の子がむきあっている。

謎の美少女が先に口をひらいた。

「ありがとう。」

「え？」

「あなたたちがこの子を助けてくれたんでしょ。」

おねえちゃんは、あんぐりと口をあけて、何もいえない。ぼくもおどろいてしまった。なぜだ。なぜわかるんだらう。

「この子、妹なの。ハーモニカを修理してもらった帰りで、迷子になっていたのよ。」

小さな女の子は、さっきのハーモニカをしつかりとかかえていた。

「とても大事なハーモニカなの。生まれたときからこの子といっしょで……。」

おねえちゃんが馬鹿みたいに突っ立っていたためだろうか。美少女は妹をつれて、ぼくらのほうに歩き出した。それは風の靴をはいているような軽やかな歩き方だった。

長い黒髪がふわりとゆれて、おねえちゃんのそばを通るとき、

「あなたは私と同じものを持っているわ。」

その人はたしかにそうだったのだ。

ぼうぜんとしたおねえちゃんを置き去りにして、彼女は歩き去った。あとから小さな女の子が、とことこついていった。

十分後、おねえちゃんとぼくは、パパと待ち合わせていたカレーショップにいた。本格インドカレーで、ちょっと話題の店だ。

「うわっ、チャコっ！ ケンジ！ そのかつこうはどうした。」

最近、ちよつと太めになってきた。パパが、おおげさなりアクションをした。かつこうといわれて、ぼくとおねえちゃんは、おたが

いの姿を確認した。

「ケンジ、あんた、ススだらけで真っ黒だよ。」

「おねえちゃんこそ……、あつそうか。」

謎がひとつ解けた。

化粧室の洗面台の前、ペーパータオルで、あちこちらだをふきながら、おねえちゃんは、うなっていた。

「あいつ、となりのクラス为天音レイコ《あまねれいこ》だよ。」

「知ってるの？」

「目立つもの。なんかね、いつも取り巻きに囲まれて、家が大金持ちだつてウワサなのよ。」

「ふーん。」

「何が、ふーんよ。これは重大なことだよ。」

「重大つて……。」

「あいつ、あたしと同じものを持つてゐるつていったのよ。もしも、もしもよ。あいつがこれを持つていたとしたら……。」

おねえちゃんは、胸のみどり色の「カウストゥバ」をにぎりしめた。

「自分のために使い放題だつてことじゃない！」

「いや、それは……。」

「あたしなんて石頭の弟に、やれ、世のため人のためなんて、苦労させられてるのに、こんなの不公平だ！」

ぼくはそんなに石頭なんだらうか。

大きな力をさずかったものは、その力を世の中のために使う義務があると思うのだけど。

ここでパパが呼びにきた。

テーブルについてからも、おねえちゃんはずつとふきげんだつた。

「注文はどうする。」

「ぼく、キーマカレーがいい。」

「タンダー・チキンをたのむか。」

「ディナーセットの方が安く上がるよ。」

パパとやりとりしてるあいだも、おねえちゃんは、うーとか、あーとか、うなりながら、

「シツポをつかんやうでやる。」

なんてぶつそうなセリフをつぶやいていた。

食事が運ばれてきて、おねえちゃんのきげんがはじめてよくなった。

「おいしい！」

この店は地元ではけっこう知られている。店内にはお香のにおいがただよ、観葉植物にまぎつてヒゲの生えた神様の像とか、へびか竜みたいな怪物の像とかが並んでいる。

もつと面白いのは、かべにかざつてあるたくさんの絵だ。どぎつい色使いで、いかにも異国風だ。

たとえば鼻の長い象の頭をしていて、手が四本あるふとつた人の絵がある。これはガネーシャという神さまなのだそう。パパのウンチクによると、商売や学問の神さまで、もともとは障害をとりぞぎ幸運をもたらす御利益があるそう。

他にも、美しい女の人がツノのある男をふみつけている戦いの神、ドウルガー、かんむりをかぶつた猿が空を飛んでいるハヌマーン、山の上の空とぶ台車に乗つたスカンダ（韋駄天《いでてん》）などの神さまの絵が、なんだか不思議なふんいきをかもしている。

これらの絵を見ながら、ぼくはインドでのことを思い出していた。

ことの始まりはパパの海外出張に、おねえちゃんとぼくがインドについていったことからだつた。そこであるお坊さんに出会い、ぼくは不思議なペンダントをもらったのだ。六角形の台座に大きな緑色の宝石がついている立派なものだ。お坊さんは「カウストゥバ」と呼んでいた。

念のためいっておくが、お坊さんはぼくにさずけたのであり、おねえちゃんはその横どりしたのである。

とにかくそれからおねえちゃんには不思議な『ちから』を使えるようになった。けれどもそれにはぼくの同意が必要だ。ぼくがその気にならなければ、おねえちゃんは決して『ちから』を使うことはできないのだ。

(※作者注・このあたりの事情は、『おねえちゃんはミラクルガール』をお読みください)

「わあ、しまった！」

ぼくはパパの声でわれにかえつた。

「小銭入れしかない。サイフを忘れてきた！」

なんてこつた。おねえちゃんはずつとチキンにかぶりついている。

「どうしようチャコ。いくら持つてる？」

「ふあ、ふあ、ふあ、ふあ、ふあ、ふあ、ないふあ。」

「こまつたなあ。」

そこへ外国人らしき若い店員が、大きな箱をかかえてテーブルを回っているのがみえた。サービスのスピードくじだ。

「ケンジ。」

おねえちゃんが、にたつと笑ってぼくをにらみつけた。はいはい。こうなつてはしかたがない。石頭といわれるのもしやくなので、ぼくは精神を統一した。

「オー……オー……オー……」

パパがきよるきよるしている。どこから声が聞こえるんだらうと思つてゐるのだ。

「スリン・フリン・クリン・ラクシユミー（吉祥天へきつしようてんぎん・スワーハー！）」

吉祥天は幸運の神だ。おねえちゃんの胸のペンダント「カウストウバ」が光り、目の色がみどり色に変わった。立ちあがつて、つかつかと店員に近より、順番でもないのにスピードくじの箱をひったくつた。

「お、お客さん。」

おねえちゃんは店員を無視して、とりつかれたようにくじの箱に片手をつっこんでかきまわしはじめた。三十秒後、おねえちゃんは一枚の三角くじを引っぱりだして、たかだかとかかげた。

「確かめて。」

くじをわたされた店員は開いてみておどろいた。

『大当たり、お食事代無料、景品を進呈します』と書かれてあつたからだ。

「いやつたーっ！」

おねえちゃんはガッツポーズをとり、腰に手をあててテーブルのあいだでおどりました。ぼくとパパは恥ずかしくて、ただただうつつむいていた。

おねえちゃん、さぐる

次の日の朝、おねえちゃんは誰にも起こされずに、リビングに出てきた。

顔を洗い、ささつと軽くメイクをして、食卓のトーストにかじりついた。なんか、普通のことみたいだけでも、それは違う。

「おねえちゃん。今日はなんか、その、あつさりしてる

ね。」

「あ、これ？」

おねえちゃんは、自分の顔を指さした。いつものおねえちゃんは、絶対に自分では起きられない。そして、鏡にむかつてる時間が、やたら長い。よく知らないけど、ファンデーションだ、マスカラだ、チークに口紅と、とにかくゴテゴテと顔を描く。

さらにその上、髪形が決まらないといつて、いつまでも頭をあっちいじり、こっちいじりして遅刻する。そういう、だらしなくケバい中学一年生が、ぼくの姉なのだ。

「考えがあるの。今日は早めにガッコ行かなきゃ。」ぼくとおねえちゃんは、めずらしく一緒に家を出た。中学校と小学校はとなりあつてゐるから、自然に同じ道になる。

「いゝいゝ。」

おねえちゃんは、通学している中学生たちに、きよるきよると目を走らせていたが、ある集団を見つけると、つ、つ、つと近よつて行つた。

「いゝいゝ。」

確かにきのうの美少女だ。何人かにかこまれながら、優雅にゐる。イケメンの男子生徒が何かいうと、天音レイコはおもしろそうに笑つた。それはいかにもお嬢様といった感じだつた。

「気に食わん。」

ふたりの声が同時にした。ぼくはあれ？と思つた。

ひとりはおねえちゃんだが、もうひとりは何年後ろから聞こえた。

「どうしたんですか？」

「あの女、だれかれかまわず口先でたぶらかすのよ。いつか化けの皮をひんむいてやるわ。」

委員長さん(?)は、自分に誓うように話すのだった。おねえちゃんには気がしてないらしい。突然、手を上げて、奇怪な行動に出た。

「おっはよう、天音さん！」

元気よくあいさつして、取り巻きをかきわけながら、ずんずん天音レイコに近づいていく。天音レイコは一瞬、あつげにとられた顔をしたが、すぐにきりりとした油断のない表情になり、笑みさえうかべた。

「おはよう。きのうはありがとう。」

そして何事か話しながら、ふたりつきりで、どんどん先に行つてしまつた。

「あの人、月波久子でしょ。」

「チャコだ。チャコ。」

関係も何もぼくにはわかる。おねえちゃんは聞き出すつもりなのだ。天音レイコがおねえちゃんと同じ『ちら』を持つてるかどうか。それから——、それからどうするつもりなんだろう???

「おはよう。おねえちゃんを見かけたのが、声をかけようとして思いとどまつた。また、天音レイコといっしょなのだ。そこで後ろからそつと近づくとにした。」

「それから、それからレイコ、どうなったの?」

「ああ〜。」

おねえちゃんは残念そうに肩を落とした。

「でもね、チャコ。監督さんが気に入ってくれて、エキストラみたいな、小さな役をもらったわ。」

「そう。」

「すっごーい！」

「画面のはしつこにほんのちよつとよ。」

「でも、すごいよお！」

ぼくは会話について行けなかつた。ふたりの関係はどうなつちやつたんだろう。

「あなたもカメラテストを受けてみるといいわよ。おもしろい個性があるもの。」

「あつしがあ？」

「受けるだけでも、いいことあるわよ。ほら、これ。」
彼女は胸のポケットから銀色のシャーペンを出した。

「それなに？」

「わからない？ 純銀製よ。カメラテストの記念にもらったの。」

「銀！」

おねえちゃんがコーンしてきた。光り物に弱いのだ。それから天音レイコは、カバンやポケットから、いろいろとめずらしいものをとりだしておねえちゃんをコーンさせた。黒真珠の指輪だの、純金製のネックレスだの、日本では知られていない一流ブランドのポーチだの。

「お金持ちなんだねえ。」

おねえちゃんがため息をつくとき、天音さんは、つまんなさそうに髪をかきあげた。

「私の家が金持ちなんじゃなく、母の実家が名門で古い家柄らしいの。そこで私にんだかんだと物をくれるわけ。私もくわしくは知らないけれど、母の家は、この国を動かせるほどの力がある名家らしいわ。毎年誕生日には、かかえきれないほどのプレゼントを贈ってくるのよ。」

「でも幸せだよ。」

おねえちゃんは物をもらえると幸せなのだ。

「でもないわ。私、数年前まで清里のサナトリウムにいたの。」

天音レイコの顔がくもった。なんだか遠い日の、悲しい日々を思い出しているような表情でつぶやいた。

「難しい病気だね……。ううん。いまはだいじょうぶ。でもあのころのことは忘れられないわ。」

おねえちゃんが悩んでいる。きつと、サナトリウム

ってなんなのかわからないのだろう。

そこはせきばらいしてごまかした。

「で、何があったの？」

「いろいろとね。規則正しいという聞こえはいいけど、毎日が単調な生活だった。なんにも面白いことがなくて、世間のこともわからないの。そんな時、ある男の子と出会ったわ。不思議な少年だった。」

「美少年？」

おねえちゃんは、そこが大事と力強くきいた。

「そういつていいわね。いつも悲しみをおびた表情をしていて、世の中の罪悪は自分のせいだと思っっているよう

なところがあつた。でも、世界について語りあうには最高の相手だったわ。私たちはこの世の中の摂理《せつり》と神の存在について何時間でも語りあつた。」

「神……ね。」

「あの子にもういちど会いたい。あの子とは、すべてにわかりあえたんだもの。」

「連絡はとれないの？」

「名前すらわからないわ。」

「運命がほんとうにあるならば、いつか会えるわよ。」

おねえちゃんは、がらにもないことをいった。

「ありがとう。あなたはやっぱりわたしと同じタイプの人間ね。心の奥底に、清らかでだれにも触れられないものがあるの。」

「そ、そうかな？」

「仲間としてこれを受けとって。」

天音レイコはポケットから、うすもも色の宝石がついている指輪をとりだした。

「これは？」

「バグドラヤっていうの。フィリピンで産出される石で、まだ価値がみとめられてないけど、いまにすごい値段で取引されるようになるわ。」

「そんな大事なものをもらえないよ。」

「いいのよ。どうせまた、母の実家からもらうから。」

結局、おねえちゃんはありがたいたくことになった。

おねえちゃんにとって、物をくれる人はいい人なのだ。

ふたりは完全に意気投合している。ぼくはどうもスッキリしなかつた。

「ね、ね、レイコ。その出演した映画って、なんてタイトルなの？」

「それがわかんないのよ。日本未公開の映画だと思うけど。」

「うーん。なんとか見らんないかなあ。」

「むりよ。チャコ。」

「そういつて、天音レイコはころころとわらつた。

「それじゃチャコ、私こつちだから。」

「じゃあね、レイコ。」

天音レイコのモデルのような後ろ姿を見送つてから、

ぼくらは歩きだした。

「なんとか見つかんないかなあ。」

「むりだと思つよ。」

するとおねえちゃんはすこしびびくりしたようだった。

「わつ、ケンジ、あんたいつからいたの？」

この時、ぼくはちよつとふきげんな顔をしたと思う。

「おねえちゃん。天音さんの正体をさぐるんじゃないの？」

「あ……。」

この時のおねえちゃんは、いつもの五割増しでマヌケな顔をしていた。

「いや、そのつもりだったんだけど……インドに行った話をして、誘いをかけたら、レイコはアメリカに行った話をして……。」

「それでハリウッドなんかの話になったの？」

「そ、そー。シャーリー・チャーチの映画に出たとか。」

ぼくは考えこんでしまった。天音さんというのは、いったいどういう人なんだろう。

何がなんだか

その店は、あやしげなビデオテープがびっしりとならんでいた。

店長が一番おくのカウンターにいた。頭を坊主にして

サングラスをかけているので、ちよつと見にはこわいが、

本当は気さくな人だ。

「よお、ケンジじゃないの。ひさしぶり。またアニメのフランス語バージョンでも探してきたか？」

おねえちゃんが、けいべつのままざしでぼくを見た。

「あんた、だんだんパパに似てきたね。」

痛いところをつかれてしまった。パパはすじがね入りのオタクなのだ。

「シャーリー・チャーチねえ……、人気があつたのはけ

つこう前だからなあ。どんな話なの？」

「えーとねえ、シャーリーが大富豪の令嬢役で、貧しい

美少年と恋愛するの。周囲の反対を押し切つてかけおち

して、小さな教会で結婚式をあげて、愛を語り合うとか

そんな話。」

「そんな話あつたかなあ？」

テーブルの上に三本のビデオテープを置いて、タイト

ルやあらすじらしき文章を、店長は熱心に読んでいた。

もちろん英語だ。

「これが一番近いかな。」

指さされたビデオテープには、シャーリー・チャーチが両手をしばられて、太った男に銃でおどされている写真があった。

「でもこれはサスペンスだな。シャーリーは富豪の娘で、いちおう貧しい美少年がでてくるらしいけど。どうするね？」

「観てから決めるってわけにはいけないの？」

「うちはレンタルビデオ屋じゃないからね。」

店長はしぶい顔をしている。

しばらく悩んだすえ、おねえちゃんはそのビデオを買うことにきめた。幸いたいした値段ではなかったが、それでも千五百円した。

「ケンジ。出しといて。」

「えーっ？」

こんな時、おねえちゃんにさからってもしかたがない。きつとかえすと約束をとりつけて、ぼくは千五百円出した。店長がサングラスのおくで同情に満ちた目をしているのがわかった。

「これでレイコについて何かわかるかも知れない。」

おねえちゃんは、めずらしく難しい顔をしていった。

家に帰るとさっそくおねえちゃんはビデオにかじりついた。しかし、いかんせんセリフはすべて英語だ。ちんぷんかんぷんで全くつまらない。富豪のシャーリーが誘拐されて、貧しい美少年探偵が捜査する話らしいが、わかるのはそれだけだ。

「ケンジ、ケンジ！」

おねえちゃんがぼくをよぶ。不吉な声だ。

「あんた、続き見てくんない。」

「レイコが出てきたら教えて。あたし勉強があるから。」

おねえちゃんが勉強なんかするわけがない。ぼくは知っている。おねえちゃんは教科書もノートも学校のつくえの中に置きっぱなしにしているのだ。「オキベン」というらしい。おねえちゃんの友だちのあいだで流行っているけれど、小学生のぼくには信じられないことだ。

「やだよ。おねえちゃんが、調べたがったんだから、おねえちゃんが見るべきだ。それより、千五百円かえしてよ。」

おねえちゃんは黙りこんだ。

二時間後、ぼくはおねえちゃんの声で呼び出された。

「ケンジ、ケンジっ。」

ぼくが画面をのぞきこむと、事件が解決したところだった。美少年は犯人に撃たれて、シャーリーの腕の中で死んでいく。そのふたりのバックで警官が小さな女の子に聞きこみしているのが見えた。それが天音レイコに似ている。

充血した目でおねえちゃんは喜んだ。

「やった、やった、確かにレイコだよ。お金がむだにならずにすんだよーっ！」

お金を出したのはぼくなのだが、それはともかく、本当に天音レイコだろうか？ 似てはいるけど小さくてわからない。

次の日、登校のときに、おねえちゃんとぼくは天音レイコをさがした。すぐに見つかった。あいかわらず、とりまきに囲まれている。

「レイコ。これ。」

おねえちゃんはカバンからビデオをとり出した。

「わかんない？ あんたが出てた映画よ。」

この時、天音レイコはとてもへんな顔をした。一瞬、ぼかんとして、それから、しらーっとしてビデオを見つめた。ややあつてわれにかえり、あの魅力的なうれしそうな顔を見せた。

「ええつ、そうなの？ どこで見つけたの？」

「こういうものをあつかつてるカルトなビデオ屋よ。こ

いつが知ってたの。」

「そういつておねえちゃんはぼくの頭をぐりぐりとした。痛いぞ。」

「そう、ありがとう。ケンジ君。」

天音レイコは美しい顔をぼくに近づけたが、ぼくには

なんだか、目が笑っていないような気がした。

おねえちゃんは最初の目的を忘れていた。

今や、天音レイコの話聞くのに夢中なのだ。

「レイコのお父さんはね、なんか外国人らしいよ。」

「天音さんってハーフだったのか。」

「そうなのよ。かっこいいなあ。」

ある時おねえちゃんは、夜中になっても帰ってこなか

った。おねえちゃんの夜遊びは、めずらしいことじゃないが、その日は家に電話があった。わざわざぼくにだ。

「あ、ケンジ君？ わたし、天音レイコよ。チャコが動

けなくなっちゃったの。むかえにきてくれない？」

「動けなくなっちゃって、どういうこと？」

「来ればわかるわ。うふふ……。」

ぼくは自転車で教えられた場所に行ってみた。下北沢

のライブハウス『天井裏』だ。おねえちゃんは、かべに

よりかかって座りこんでいた。寝ているらしい。ぼくは

店の人に事情を聞いた。

「その子なら友だちとふたりで来てただけで、カクテルで酔っぱらったみたいだね。友だち？ どっか行っちゃったよ。」

置き去りにして帰るなんてひどい話だ。とにかくタク

シーにおねえちゃんを乗せて、ぼくらは家に帰った。明

日、自転車をとりにもどらなくてはならない。

家に着いてからが問題だった。近くの公園で酔い覚ま

しさせようと、えつちらおつちら、裏の緑道に運んだ。

ベンチに横たわったおねえちゃんは、へんな寝言をい

った。

「こらあ、レイコ！ はくじようしろ！ あんたあたし

とおんなじ……。」

むにやむにやといながら、横をむいて寝息を立てた

おねえちゃんを見ながら、ぼくはこのへんが潮時なんじ

やないかと考えていた。

「レイコって、かわいいそうだよ。」

「どこが？」

「清里のサナトリウムで知り合った男の子のことが、ど

うしても忘れられないんだって。あつ、サナトリウム

って、病院だよ。療養所のことだよ。知ってた？」

「知ってるよ。」

「だから、いい寄ってくるオトコはいっぱいいるけれど、

ボーイフレンドも恋人も作らないんだって。」

「サナトリウムの男の子って、神の存在がどうか……。」

「そう。その子よ。なんとか見つけられないかなあ。」

おねえちゃんは、しおらしい表情でこまったような悲

しそうな顔をした。あれから何日たったか、全然おねえ

ちゃんらしくない！

「おねえちゃん！」

「はい？」

おねえちゃんは、ピョコタンとリビングのソファアームに正座した。

「天音さんのこと、好きなの？」

「へ？」

「どうなの？」

「な、な、な、何いつてるのよ、あんたは……。」

おねえちゃんは、アウアウいいながら、テーブルの上のコーラに手をのぼした。

「恋しちゃったの？」

その瞬間、おねえちゃんはブーッと水鉄砲のようにコーラを吹いた。

「げほっ、げほっ、げほっ……あ、あんたねー、なんてことを、げほっ……。」

「おかしいよ、おねえちゃん。もう天音さんにはかわらないほうがいい。」

「でも、でもあの時レイコはいったんだよ。マリキットを助けたのはあたしたちだって。あたしがレイコと同じものを持って……。」

「マリキットって誰？」

「レイコの妹よ。そういう名前なの。」

「そうなんだ。でも、おねえちゃん、気がついてないみたいだけど、あの時は、ぼくたちふたりともススだらけだったんだよ。当てずっぽうで、ぼくたちが助けたと思っただけじゃないの？」

「あ……………」

おねえちゃんの表情が、はたと動かなくなった。まったく思ってもいなかったらしい。

「それからね、おねえちゃん。清里のサナトリウムがどうとかって話だけど、ぼくもインターネットで調べてみたんだ。療養所でもないんだ。どこにでもある普通の病院になっちゃってるんだよ。」

「えーっ！ じゃ、じゃあ、レイコがウソをついてるってこと？」

「そうなるよ。」

「でも、あたしと同じものを持って……。」

「確かにそれはまだよくわからないけど……。」

そうして、おねえちゃんは元気がなくなつた。これはめずらしいことだ。家の中が静かになっていいが、食事

の席が暗いのもいやだ。おねえちゃんは、むつとりとだまりこみ、天音レイコにもらった例のバグダラヤの指輪をもてあそんでいる。

それを背後から、お母さんがみつめていた。ちよっと心配そうな顔だ。おねえちゃんの変化に気づいているのだろうか。どうでもいいことだが、うちではパパはパパだが、お母さんはお母さんとよばれている。

「チャコ。それどうしたの？ なつかしいもの持つてるわね。」

お母さんが、会話の糸口をさぐるように話しかけた。

「えっ、この指輪、知ってるの？」

「そうねえ。わたしが子どものころ、縁日の夜店でよく売ってたわ。今でもあるんじゃないかしら。」

おねえちゃんは、信じられないという顔で固まってしまった。

「チャコ？ どうしたのチャコ？」

シヨックで放心状態のおねえちゃんは、目が死んでうごかなかった。

おねえちゃん怒る

その夜のうちに、おねえちゃんは親友の真紀さんに電話した。

「真紀ちゃん、聞いて聞いて、あたし、あつたま来てんの！」

「あはは。そろそろ電話してくるころだと思つたよ、チャコ。天音レイコのことでしょ。」

「な、なんで知ってるの？」

「知ってるコは知ってるわよ。例の、『あなたは私と同じものをもっているわ』ってやつでしょ。」

「ええっ！」

「あたしもいわれたんだよ。けっこういろいろんなコがいわれてるみたい。」

なんてこつた。してみると、いままでの天音レイコの言葉はことごとくウソだったと考えるのがいいだろう。

「許せーん！」

おねえちゃんは天井にむかって絶叫したのだった。

「ケンジッ！ 行くよ！」

「ど、どこへ？」

「レイコのところに決まってる！」

「家、知ってるの？」

「こ・れ・が・あ・る・で・し・よ！」

おねえちゃんは、「カウストウバ」をにぎりしめて、野獣のような顔をした。とても逆らえるふんいきじゃない。

覚悟を決めて、ぼくはおねえちゃんにしがみついた。

「オー……ン……、ハレー・クリシュナ・スタパティ

ア・ハレー……、シツデイ・マハー・シツデイ！」

カウストウバが光り、おねえちゃんの目の色が変わり、へやの様子が、マープル模様にくにやりと曲がった。空間が流れる感覚がして、次の瞬間、ぼくたちは近所のビルの屋上に立っていた。

また空間が流れ、次の瞬間には、はるかに高いビルの上に出た。眼下に広がる世田谷の夜景がすばらしい。

またまた空間が流れ、こんどはよくわからない場所に出た。西洋の円形の城みtainところだ。暗くて風がつかめたい。

最後に着いたのは、その城みtainなもの近くの地面の上だった。

「あれは駒沢の給水塔じゃないか。」

こんな近くで見たのは初めてだった。何十メートルあるだろう、街の灯を背景に、黒くろとしたシルエツトで、ふたごの塔が立っている。塔のてっぺんは王冠のような独特の形をしていて、それが西洋の城みtainだ。塔と塔は鉄橋のようなものでつながっていて、ふたつは一体だということがわかる。

見あげていると、こちらへのしかかりそうな存在感があった。

「このへんにレイコがいるはずよ。」

暗くてよくわからないが、高級住宅地らしい。

と、闇の向こうからハーモニカの音が聞こえてきた。それはものさびしい聞き覚えのあるメロディで、懐かしいような心細いような、不思議な音色だった。

おねえちゃんとぼくは、ハーモニカの音にさそわれて、夜の路地を歩いた。すると一軒のアパートがあった。

まわりの住宅地にまったく似つかわしくない、みずばらしい建物だった。かべも屋根もトタンでおおってある、みるからに古いアパートだ。

鉄の階段の下に腰かけて、ひとりの女の子がハーモニカを吹いている。

「マリキットだよあれ。」

おねえちゃんが駆けよった。

「おねえちゃん、乱暴はいけない。」

「うっさいわね！ マリキット、あなたのお家はどこ？」

マリキットは、黙って一階の右から二番目の部屋を指さした。

「おのれ、レイコーっ！」

おねえちゃんは、その部屋に突進した。もう誰も止められない。

「たのもー、たのもー！」

おねえちゃんは乱暴にアパートのドアをたたいた。

「こらっ！ レイコー！ いるんだろ、出てこーい！」

ガチャリとカギをあける音がしてドアが開いた。そこには背の高い男が立っていた。目もと口もと、どうみても日本人ではない。アジア系の外国人だ。

おねえちゃんは意外なゆきにポカンと口をあけた。

何者なんだろう、この人。しばらくお見合いしてから、おねえちゃんが聞いた。

「あの一、あなたはだれデスカ？」

なぜか語尾のほうで外国語口調になる。

「私はレイコの父でハギビスといます。」

その人はなめらかな日本語で答えた。

「ええっ！ レイコって本当にハーフだったの？」

おねえちゃんはおどろいた。ぼくもおどろいた。全部が全部ウソではなかったのだ。

「レイコ。お友だちだよ。」

ハギビス氏が中に声をかけると、天音レイコが出てきた。トレーナーにジーンズというラフなかつこうだ。彼女はクールに髪をかきあげて一言いった。

「ここじゃなんだから。」

さっそうと歩いていく。ついてこいということらしい。

「レイコ。マリキットも連れて行ってくれ。」

ハギビス氏が声をかけると、天音レイコの足どりが乱れた。

「なんでよ。お父さん。」

「私はこれから出かけなきゃならん。」

天音さんはちよっとなまげな顔をした。こんな顔もするのだ。

うしろから、あのかわいくない少女が、ちよこちよことついて行った。

天音さんとぼくらは近くのファミレスに入った。

「ドリンクバー、四つ。」

彼女が指を四本立てるのを見とどけてから、おねえちゃんが切り出した。

「さて、どういうことか説明してもらおうじゃないの。」

両手をテーブルにおいてうなづいている。じりじりと怒りを放出しているようだ。

天音レイコは神妙な顔をして話しはじめた。

「あなたには悪いと思ってるわ。いろいろと気を引こうとしたのはすべて、あなたに友だちになってほしかったからなのよ。私のまわりには、だれかしらいつもいるけれど、本当に真実について語り合える人がいなかったのよ。」

「真実……ね。」

おねえちゃんは歯をむき出したが、天音さんはかまわず話しつづけた。

「そう、真実よ。なにが正しくてなにがまちがっているか、真剣に考えている人が、この世の中でどれだけいると思う？ あなたとならそれを語り合えるわ。私たち、『腹心の友』になれると思うの。」

「それって、ジャイアンみたいな、心の友よーっていう……。」

「おねえちゃん、ちがう。『腹心の友』は赤毛のアンだよ。」

すかさず天音さんは、おねえちゃんを指さした。

「あなたは普通の人じゃないわ。」

おねえちゃんの動きが止まった。ぼくはハラハラした。

なぜかって、おねえちゃんが、

「そうなのよ、わっかるー？」

なんて、はしゃぎだすのではないかと思ったのだ。じつさい、まんざらでもない顔をしている。

「あなたには、何か真実を感じるような力があるわ。あなたは特別な人なのよ。」

おねえちゃんの顔がゆるんできたので、ぼくはだんだん不安になつてきた。

「サナトリウムの男の子の話なんてしたけど、本当はあなたと『神』の存在について話をしたかったの。」

「どうして？ どうして、あたしなの？」

天音レイコはすぐには答えない。自分の心を開くのに

勇気があるように、天音レイコはこぼしをしばりだした。

「……だって、あなたは神秘的な人だもの。」

天音レイコはちよっとさびしそうにほほんだ。おねえちゃんは完全に顔がゆるんでいる。

「えーっ？ そう？ そう思う？」

おねえちゃんは、でれでれにたと答えた。

「本当よ。あなたのその神秘性はどこから来るのかしら？」

「それはねえ……。」

そこでぼくは、おねえちゃんの足をふんづけた。

「あつ、いやっそのつ、神さまっているよね。絶対。」

「あなたもそう思う？ それがわかる人って少ないの。」

ここで天音さんとおねえちゃんは、神さまについてなにかんだと話をしたのだが、となりでぼくは、気が気じゃなかった。

かわいくない女の子——マリキットが、ドリンクバーでオレンジジュースのボタンを押していたが、どうやら中身が切れているらしい。ぼくは店員さんについて、補充してもらった。この子不思議な子だ。ジュースが出てくる前も出てきたあとも表情がまったく変わらない。口をへの字に結んでふくらませ、ずつとふきげんな顔をしている。

ふたりで席にもどつたら、天音さんがお札をいった。

「ありがとうケンジ君。マリキットにやさしくしてくれて。」

この時の天音さんは、いままでよりほんの少しやさしげだった。

「この子も大変なのよ。ひとりにしておく、誘拐される危険があるの。」

「えっ、ユーカーイ？」

おねえちゃんが身を乗りだした。

「私たち、あんな暮らしをしてるのには、わけがあるの。私の母の実家が大きな家だってことはいつたでしょう？」

母は名門で大金持ちの家の娘なので、外国人の父と結婚はできなかったのよ。」

「どういうこと？」

「かけおちしたの。」

「かけおち！」

「そうなのよ。逃げるとき、それなりにお金になりそうなのは持って逃げただけで、だんだんとお金がなくな

なったの。なにしろ、逃げてるとちゅうで私が生まれ、マリキッドが生まれたのだから、かかった費用も大きかったと思うわ。でも、母は結局……。」

天音さんは目をふせた。どうなったんだらう。だが、その話は天音さんはしなかった。

「私たちはそのうち、父の国のバランガイ・ルンバンという土地に逃げることにしているの。それまではなんとかこの子を守らなくてはならないわ。父はああ見えて貴族の血を引いてるんだって。」

「えっ、ハギビスさんが？」

「そうなの。だから、父の実家ならやつらも手は出せないはずよ。」

「う〜う〜む……。」

おねえちゃんは目を閉じて考えこんでいる。

ぼくは、これまでだと直感し、おねえちゃんの腕をつかんでさげんだ。

「おねえちゃん、帰るよ！」

「へ、な、なによケンジ！」

「いいから、帰ろう！ 門限だよ！」

ふたり分の代金を置いて、ぼくはおねえちゃんを引っぱって外に出た。

帰りは地下鉄に乗った。電車に乗ってるうちに、おねえちゃんも、だんだんまともに頭が働くようになったらしい。

「ねえ、ケンジ。あたし、また、だまされかけてた？」

「その通り！」

天音さんの危機

キッチンにあるテレビから、聞き覚えのあるメロディが流れてきた。シチューのCMのようだ。幸せそうな、あったかい家族がテーブルをかこんでいる。

「あ、この曲……。」

おねえちゃんも気がついたようだ。

「マリキッドのハーモニカの曲だね。」

ぼくらは顔を見合わせた。

「懐かしいわねえ。それは確か、『家路』って歌よ。」

横からお母さんが顔を出した。

「家路？」

「遠きー、やーまにー、ひーはおーちてーって歌よ。」

「はっはっは、それは微妙にちがうな。」

笑いながら台所にパパが入ってきた。パパはこういう時、あれこれいいなくなるタチなのだ。

「どうちがうのよ。」

お母さんはちよつとむつとしたようだ。

「その歌にはバージョンちがいがあって、『遠き山に日は落ちて』というやつと、もう一つが『家路』なんだ。『家路』の歌詞は、『ひびきたる鐘の音に……』っていうのさ。他に宮沢賢治も独自の歌詞をつけているのだぞ。」

例によって、パパは得意そうにウンチクをひろうする。

「原曲は『ドヴォルザーク交響曲第九番・新世界から』の第二楽章なのだよ。」

「あら、それをいうなら『新世界にて』じゃないの？」

「いや、『から』だったと思うけどなあ。」

「『にて』よ。絶対。」

ここで『から』なのか『にて』なのか、ふたりの論争がはじまったのだが、ぼくがあとで調べたら『新世界より』だった。正解はどれなんだろう。

ドヴォルザークという作曲家が、新大陸アメリカで作った曲で、ふるさとを懐かしむような、一方で新しい世界に希望を見ような、そんな思いで作った曲らしい。

「いい年をして何をいいあらそってる。」

おじいさんが台所に入ってくると、パパもお母さんもだまりこんだ。いつものように暗い食事がはじまった。テレビのCMとはかなりちがう。

ここはぼくの家であってぼくの家ではない。もともとぼくら一家はパパの会社の社宅に住んでいたのだが、パパがリストラに会ってしかたなくこの家にくるがりこんだのだ。したがって、みんなおじいさんに気を使う。

「ケンジ。ニュースにしなさい。」

「はい。」

おじいさんはニュースと時代劇ぐらいいしか見ない。他の番組は低俗でくだらないのだそうだ。

テレビでは、渋谷の飲食店が強盗に入られた事件をやっていた。捕まった犯人は、不法滞在のアジア系外国人らしい。

「また、外国人の犯罪か。あんな連中がいるからこの国の治安が乱れるんだ。さっさと追い出せばいいのに、政

府は何をやつとる。」

おじいさんはテレビに説教をはじめた。

「でも、悪い人ばかりじゃないと思うよ。」

こんなとき、ぼくは、つい、いわなくていいことをいう。

「わしがいつてるのは、日本に住むからにはきちんとしてるということだ。外国人が日本に住むのは仕方がない。だが、日本に住むからには日本人になるべきだ。ちゃんと日本の国籍をとって、正々堂々と日本で暮らせばいいのだ。そうすれば、犯罪者なんか入ってこないし、ちゃんとした人間だけ日本に住むことになる。これが正論というものだ。ちがうか？」

ぼくは答えられなかった。日本の国籍なんて、そんな簡単にとれるものなんだろうか？

よく朝、ぼくとおねえちゃんはいっしょに登校した。おねえちゃん、天音さんと一緒に登校してるうちに、早起きの癖がついたのだろうか。

通学路を歩いていると、小さな人がきができていて、そのむこうで何やら言い争っている。

「へんな話でみんなを振り回すのは、もうやめてほしいの！」

「私が私であることは変えられないわ。」

「ホラ話をやめろっていつてんのよ！」

おお、天音さんに、いっぞやの三つあみ委員長さん(?)が突つかかっている。

「あら、私、ホラとウソは大嫌いなんだけど。」

すごい。天音さん涼しい顔して動じない。

「外国の映画に出たとか、療養所にいたとか、ウソっぱちはやめなさい！」

「あら、どうしてウソだなんていうのよ。」

「ウソくさい話だからよ。ここにいるあんたの取り巻き以外は、たいていの子はそう思ってるわ！」

ああ、やつぱりそうなんだ。みんな、おねえちゃんよりは頭がいい。

「清里の療養所で美少年と語り合っただすってえ、そんな昭和の昔話みたいなこと、誰が信じられるっていうのよ。あんたたちも目を覚ましなさい！」

委員長さんに一喝されて、取り巻きさんたちがざわめ

きだした。

天音さんが言葉につまった。これはちよつとピンチかもしれない。

見物してるぼくのそでが、おねえちゃんに引っぱられ、ぼくは細い路地に連れこまれた。

「助けてい……。」

おねえちゃんが渋い顔でつぶやいた。

「ええ、本気なの？ あれだけ振り回されたのに！」

「レイコってさ、たぶん、空想と現実がこっちゃになっちゃうところがあるんだよ。悪気はないんだよ。——たぶん。」

最後はちよつと自信なさげに、おねえちゃんはいった。

「でも、助けるといったって、どうやって……。」

その瞬間、ぼくの口から神聖な音声もれだした。

「オー……ン……、ナムナラヤ・ビデムヒ・ワスデワ・デムヒ・タンノ・ビシユヌ（化身の神）・プラチヨダヤット……。」

おねえちゃんの胸の「カウストウバ」が光り、おねえちゃんのからだ全体が、うすい明かりに包まれながら変形していった。背が伸びて、髪が短くなり、足が長くなった。

気がつくとおねえちゃんは男の人になっていた。顔はおねえちゃんに似ているが、まちがいに男の人だ。着ている服までも変わっている。さっぱりとした身なりの好青年だ。

「そうか。こういうことなのか。」

おねえちゃんは、ちよつとハスキーな声を出し、自分の両手を見た。

「行ってくる。」

路地を飛び出した青年姿のおねえちゃんは、まっしぐらに天音さんにむかった。

「レイコ、レイコじゃないか！」

「ふえっ？」

突然現れた好青年に、天音さんも委員長さんも取り巻きのみなさんも、あつげにとられた。

「ぼくだよ。軽井沢拓也だよ。何年ぶりかなあ。清里のサナトリウムで一緒だったじゃないか。」

どっから思いついたのか、おねえちゃんは適当な名前をでっちあげた。

「ああ！」

天音さんが絶妙のタイミングで、思い出したという顔をした。

「拓也さん！ 懐かしいわ。私ずつとあなたのことを待っていたのよ！」

アドリブでこの反応はすごい。この人は本当に役者になれる。

「レイコ！」

おねえちゃんは、感激して天音さんに抱きついた。まわりから「キヤーーーーッ！」っていう声上がる。天音さんの目があさつてのほうをむいて、口だけ微笑んでいる。ちよつとこつけない顔だ。

「ウツソーーー！」

委員長さんが目を白黒させている。ここは切り上げどきだ。

「軽井沢さん。もう、みんな出発するところです！」

ぼくは、乱入といった感じで中学生たちの中に入りこんだ。

「うっ、えっ……。」

おねえちゃんがおどろいている。ぼくはたたみかけた。「また、長野に帰るんじゃないですか。みんな待ってますよ。」

「そうか……いや、そうだった。レイコ。君のことは、このケンジくんに聞いたんだ。ぼくは帰らなければならぬ。」

天音さんが、羽の生えた猫でも見るような目で、ぼくを見た。

「それじゃ、元気だね！ 君のことは忘れない！」

おねえちゃんは腕を直角に立てると、くるりとふりむいて、走り去った。みんながそっちに注目してるうちに、ぼくも後ずさりしながら、逃げ出したのだった。

とりかえしのつかないこと

後から聞いた話だが、その日、天音さんは、遅刻してやってきたおねえちゃんを、一日中見ていたそうだ。

しきりに考えこんでは首をふり、悩みに悩んでいたらしい。

おねえちゃんのほうは、正体がばれるんじゃないかと、

ビクビクものだったそう。

だが、天音さんの受難はまだ続いた。

帰り道、中学校の近くの路上でぼくは見た。例の三つあみ委員長さんが、数人の中学生の前で、紙をひらひらさせていたのだ。

「ついに手に入れたわよ。天音レイコの住所！」

「住所？」

「そう。あいつの家って、保護者会の連絡名簿にも載ってないのよ。すっごく怪しい。」

「それなら、どうやって調べたのさ。」

「職員室で、先生のファイルからちよつといたきてきたの。学校にはちゃんと住所がとどけてあるもの。」

何人かの生徒から、やりすぎだという非難の声があがった。

「何よ。あんたたち、あいつがいとこのお嬢様だと思ってるんでしょ。私があいつのウソをあげてやるわ。今日か明日に地図で場所を調べておいて、日曜日にあんたたちを連れてくわよ。」

委員長さん、おそるべき執念だ。なんでそんな得にもならないことをするんだらう。

「私、ウソやぎまんが、絶対に許せないの！」

うーん。そんな人もいるのか。これは天音さん、大変なピンチだ。

夜、家でおねえちゃんにその話をしてみた。

おねえちゃんは両手を腰に当て、首を直角に曲げて、ずくづくとうなっていた。

それから部屋を八の字にぐるぐると歩きはじめた。

十回ぐらい回ったあとだろうか、おねえちゃんはドアのノブに手をかけた。

「あたし、知らせてくる。」

「誰に？」

「レイコによ！」

「落ち着いてよ、おねえちゃん。知らせたってどうなるもんじやないと思うよ。」

「それはそうだけど……。」

「ウソって結局はばれるもんだよ。自業自得って言葉もあるし。」

おねえちゃんは、今度は両手をこめかみに当てて、ぐりぐりと自分の頭を攻撃しはじめた。

「何やってんの？」

おねえちゃんは、ぐりぐりをやめない。
そして突然さげんだ。

「やっぱり、知らせなきや！」

出て行くこうとするおねえちゃんを、ぼくは引き止めた。
「もう、十一時近いよ、おねえちゃん。気持ちはおわかつたから、明日の朝に行くことにしようよ。」

おねえちゃんは、今まで見たこともないような真剣な顔で、こつくりとうなずいた。

よく日は土曜日だった。

前回とちがい、今度は地下鉄で来たので、どうもアパートの正確な場所が思い出せない。

「確か駒沢の給水塔の近くだったよ。」

「こつちの道でよかつたかなあ。」

近所の人だろう、ゴミの集積所を掃除してるおばさんがいたので、おねえちゃんは聞いてみた。

「あー、すいません。このへんに、ハギビスって外国の人が住んでるアパートを知りませんか？」

「なにっ、外人？」

「ええ。まあ……。」

おばさんの態度が一変した。

「困った一家だよ、まったく。夜になると子どもはハモニカを吹くし、ごみの分別はてきとうだし、自治会費は払わないし……。」

おねえちゃんとぼくは顔を見合わせた。

「なによりも気味がるのはね、ときどき外国人なまがあつまって、あの家にたむろすることだよ。うるさいったらありやしない。まわりの住人の迷惑なんて、なんにも考えてないんだあいつらは。それにね、どうやらあの人たち、不法滞在らしいよ。」

「不法滞在って……。」

「犯罪者ってことさ。」

「えっ、うそでしょ？」

「うそなもんかね。すぐそこがアパートの大家の家だから、行って聞いてみな。いつも、だまされただまされたって、いつてるよ。」

「何をだまされたんですか？」

「何でも契約の時は日本人のおねえちゃんがやってきて、それで安心して部屋を貸したんだって。外人が住むなんてちつとも知らなかったそうだよ。」

「その奥さんって人は今でもいるんですか？」

「逃げちまったんだよ。まったく最近の若い女は……。」
新事実におねえちゃんとぼくは衝撃を受けた。

おねえちゃんのかわりに、ぼくがたずねた。

「それで、アパートの場所は……。」

「そつちの路地を右に入っただよ。あんたたち、外人の仲間かい？」

「い、いえ、ちよつとした知り合いです。」

ぼくは、おねえちゃんの背中を押して、路地に入った。

アパートに着くと先客がいた。五十歳ぐらいで顔のどかい、太った女の人だ。ピンク色のどぎついめがねをかかっている。

女の人は金の鎖のついたためがねを上げ下げして、ぼくたちを見下ろした。

「あんたたち、誰？」

「ハギビスさんちに用があるんですが。」

「それなら後にするんだね。私が今、大事な話をするところだから。」

女の人は乱暴にドアをたたきだした。

「こらーっ！ ハギビス！ いるんだろ、出てこーい！」

このあいだのおねえちゃんにそつくりだ。

ドアが開きハギビスさんが出てきた。

「大家さんどうも。家賃でしたら、きちんとはらつてるはずですが……。」

大家のおねえさんは腰に手をあてて、近所に聞こえるくらい大声でさげんだ。

「寝ぼけたこといってんじやないよ。いままで何度も出て行け出て行けといつてるのに、しつこく居座りやがって、ずうずうしい。いつになったら出て行ってくれるんだい？ 近所からも苦情が出るんだよ。私は外国人なんかに部屋を貸したおぼえはないんだからね。さつさと出て行つてくれなきやこまるよ！」

大家さんは、いつきにまくしたてた。

ハギビスさんはとてもこまつた顔をしていたが、とにかく頭を下げた。

「すいません。もう少しだけ待っていただけませんかでしょうか。以前いったように、私は失業中で職をさがしているところなんで、なかなか別のアパートが見つからないんです。それに娘たちもおりますし、子どものためにも、もうしばらくお願いできませんか。」

おくのほうから、マリキットと天音レイコの顔が見え

た。おねえちゃんと天音レイコの目が合った。おねえちゃんには信じられないという顔を、天音さんはくちびるをかみしめていた。

と、大家さんが下品な高笑いをはじめた。その声はボロアパートにひびきわたり、どこからか赤ん坊の泣き声が聞こえた。

「何が失業中だよ。あんたのビザなんかとつくに切れるだろうに。あんたは不法滞在だ。犯罪者なんだよ。仕事なんか見つかるものか。それに娘だつて？ 上の娘はこまつしやくれたウソつきに育ってホラばつかり吹く。下の娘なんか、出生届も出してないらしいじゃないか。日本人ですらないだろ。あんた、親らしいことなんか一つもしてないで、なにが娘だ。」

「それはいろいろと私が日本に不慣れたためだったので……。」

ハギビスさんは答えようとしたが、大家さんがさえぎつた。

「ようするに女房に逃げられたからだろう。日本語の読み書きもできないやつが、日本にいる資格なんかないんだよ。いや、日本から出て行くのはどうでもいいけど、私のアパートからは、出て行つてくれ。」

大家のおねえさんはどなりちらし、ハギビスさんはそれこそ懸命なだめた。

このやりとりを、おねえちゃんがどう見ていたか考えるのは興味深い。お金持ちの太った大家に、貧しい外国人がひたすらあやまつて頭を下げているのを見ると、どちらの言い分が正しいかどうかなんてどうでもよくなつてしまう。これは好き嫌いの問題だ。

「ちよつと、おねえさん！ それひどいんじゃないの！」
あんのじょうというか、おねえちゃんは突っかかりだした。

「きちんと家賃をはらつてる人を、犯罪者だなんだとどろぼうみたいにいうなんて、あんたの顔のほうがよくぼど悪人にみえるよ！」

おねえちゃんが大家のおねえさんをにらみつけると、おねえさんは一瞬、おどろいた顔をしたが、すぐに反撃した。

「なんなんだよ、このケバいい子は。ハギビスあんたの親戚かね？ え、ちがう？ だったら口をださないでおくれ。なんだろうねえ、最近の娘は、知らない大人にそんな口をきけと学校で教えてるのかね。あんたどこの学校

だ？ 住所と名前をいいな。いえないだろう。どうせろくでもない、頭からつぼの不良娘だろうが。」

これはある意味あたっている。

「まあよく見ると憎らしい顔してる子だねえ。だれにも好かれな顔だね。ボーイフレンドもないんだろ。かかか。頭が悪い上に友だちに好かれな顔で、みじめな子だねえ。身なりもセンスも悪いねえ。ピンボ―な親なんだな。絶対幸せになれないね。」

「なんだって、くそばあ！ あんたみたいにぶくぶく太ったブタみたいな女、見たことないよ！」

おねえちゃんがそうさげぶと、天音レイコが大家のお婆さんのうしろで、手をふって口に人差し指をあてているのがみえた。必死な顔をしてる。やめてくれといいたいのだ。

「なんだと、このドブス！ ようもいったね。」

「ブスとはなによ！ あんたなんか、ブタのからだにブルドッグの首をつけた新種の動物じゃない。首輪つけて歩いたら？」

「もう一度いつてみなドブス娘！ これ以上いつたらひどい目にあわせてやる。」

「なんどでもいつてやるよ。欲ブタ！ ケチブタ！ 馬鹿ブタ！」

「おのれ！ もう許せん！ これを見な！」

大家のお婆さんはふところからケータイを出した。

「それが何よ。」

「いまここで、入国管理局におまえらのことを通報すれば、ハギビスは監獄行きだよ。ひっひっひ。さあ、どうするね。」

ハギビスさんが飛び出してきた。

「す、すいません。大家さん。それだけはかんべんしてください。」

「いや、こんなぶじよくを受けたのは生まれてはじめてだ。絶対に許せないね。」

「そこをなんとか。」

「あんた土下座って知ってるかい？ 日本じゃだれかにあやまるときはそうするのさ。」

ハギビスさんはひざまずいて、両手をゆかにつけ、頭をさげた。

「まだ、頭が高いんだよ！」

大家のお婆さんは、靴でハギビスさんの頭をふみつけ

て、ゆかに顔を押しつけた。

反射的な行動だったのだろう、おねえちゃんは大家のお婆さんに体当たりをくらわせた。お婆さんは、かべに激突してゆかにひっくりかえり、あおむけのままわめきたてた。

「今日中だ！ 今日中に出て行け！ さもないと、監獄にぶちこんでやる！」

手足をばたばたさせながら、わめきつづけている。

「こんなとこに一秒だっていることはないよ。さっさと引越そう！」

おねえちゃんがそうさげんでふりかえると、天音レイコが大きいため息をつき、やれやれという顔をして首をふった。

「あんたってば、なんにもわかってないのね。」

家なき子

大家のお婆さんが腰をさすりさすり引き上げたあと、おねえちゃんハギビスさんを引っぱって、不動産屋をさがした。あたらしいアパートを借りるなら、不動産屋に行くものだ。おねえちゃんもそのくらのことは知っていた。

駅前にこじんまりとしたJ不動産があった。入り口や窓にべたべたとアパートのチラシがはってある。事情を考えると、あまり高い部屋は借りられない。ちょうどよさそうな安い物件があることを確認してから、ぼくたちは中に入った。

店の主人は頭のはげたおじさんだった。

「いらつしや……。」

おねえちゃんのうしろにハギビスさんの姿を見たとき、おじさんの顔色が変わった。よごれた犬でも見るような目つきになったのだ。

「部屋を借りたいんだけど。」

「あんたかね？」

「いえ、この人なんですけど。」

おねえちゃんはハギビスさんを紹介しようとしたが、おじさんはそれをさえぎった。

「あー、わるいけどね、売り物がないんだよ。」

「へ？ だって、外のチラシ……。」

「ないつたらない。出てってくれ。」

それっきりおじさんは、そっぽを向いてお茶をのみはじめた。おねえちゃんが何を話しかけても何もいわない。しかたがないのでぼくらは外に出た。おねえちゃんは怒ったが、ハギビスさんは微笑していった。

「どこもこんなもんだよ。」

おねえちゃんはおどろいた顔をした。

となり街にA不動産という店があったので、同じように入ってみた。店にはキツネみたいな顔をした女の人がいた。

「こんにちわ。」

「あら、おじようさん、こんにち……。」

この人もまた、ハギビスさんのすがたを見たとき、かわしい顔をしてくちびるをつき出した。

「なんの用？」

「部屋を借りたいんです。」

「だれが？」

「この人です。」

女の人はハギビスさんを見て、やっぱりねという顔をした。

「えーつとねえ、部屋を借りるには保証人がいるの。あんな日本語わかる？」

「わかります。」

ハギビスさんはきれいな発音で答えた。

「保証人は日本人じゃなきゃこまるよ。それもふたり。」

「ふたりですか？」

「そう、ふたり。」

ハギビスさんは考えこんでしまった。あとで知ったのだが、保証人というのは普通はひとりでもいいそう。この女の人は、ぼくたちを追っぱらう口実にそういったのだ。

「住民票も必要だよ。それから、外国の人は一年分の家賃を前払いしてもらおうことになってるんだ。」

「一年分？」

「無理だろう。そうだろうね。じゃあ出てつとくれ。」

キツネの女の人は、にこにこことぼくらを外に追い出した。

「なんなのよ。あれは。」

おねえちゃんはふんがいがいたが、ぼくにはだんだん事

情がわかってきた。天音レイコの「なんにもわかってない」とはこういうことだったのだ。

P不動産のままで、ぼくらが物件の書いたチラシを見ていると、店の中の男がハギビスさんを見た。男はハギビスさんに、犬でも追っばらうみたい、シツシツと手をふった。

どこもこんな調子だった。ぼくらはつかれはててハギビスさんのアパートにもどってきた。

「どう？ わかった？ 世の中ってこういうもんなのよ。」帰ってきたおねえちゃんに、天音レイコはそう言い放った。

「あなたがしてくれたことの重大さに、気づいてもらえたかしら？」

天音さんが、おねえちゃんの顔をにらみつけて冷やかかというとおねえちゃんはだまりこくってからだじゅう小さくなった。思いつき後悔している。

「やめなさい。レイコ。」

ゆかに座りこんだハギビスさんが、肩をおとしながらいった。

「どっちみち、ここに住むのはもう限界だったんだ。私がおねえちゃんにばかりに、引越してもできず何年もたってしまった。無理なんだよ。もう。」

しばらくのあいだ、部屋が静まりかえった。するとマリキットがハーモニカを吹きだした。いつものように、ドヴォルザークの九番『家路』の曲だ。ものさびしいメロディが部屋に響いた。

窓から夕日がさしこみ、アパートの質素なへやが明るくなった。このへやはこの時間しか日がはいらぬことに、ぼくはそのとき気がついた。

ハギビスさんが立ち上がった。

「このままこうしているわけにもいかない。今夜は友だちの家に泊めてもらえよう。たのんでみよう。」

部屋には電話がなかった。ハギビスさんは近所の公衆電話から友人に連絡をとった。ボックスの中のハギビスさんはちよつと明るい顔になったが、すぐに残念そうな顔をして出てきた。

「弱ったよ。彼もせまいアパートに暮らしていて、子どももいるんだ。私ひとりぐらいいならなんとかなるが、三人は無理らしい。」

こうしているあいだにも日はどんどん沈んでいく。夜

がせまっていた。ハギビスさんは、こまり果てた顔をしているし、天音さんは夕日を見つめている。

おねえちゃんは、何か口のなかで、もごもごいっている。

「あたしが……。」

やがてはつきりといった。

「レイコとマリキットをあたしの家に泊めます。」

これには一同、びくくりした。天音さんはぼかんと口をあけているし、ハギビスさんもおどろいた。

「あまえるわけにいかないなんていう余裕は、いまの私にはないんだが……。」

ハギビスさんはとまどっている。

「しかし、家の人が許してくれるだろうか。」

「そこだよ。おねえちゃん。」

ぼくも気がかりだった。

「パパとお母さんは事情をいえばなんとかなると思うけど、あの家はおじいさんのものだ。おじいさんは絶対ゆるしてくれないよ。」

「まかせて！」

おねえちゃんはまっすぐにハギビスさんを見た。

「絶対、なんとかするからあたしを信じて。」

おねえちゃんがぎつぱりといったからだろうか、ハギビスさんは、ふたりの娘をおねえちゃんにたのむことにした。さつそくみんな荷づくりをして、貴重品や衣類をボストンバッグにつめこんだ。おねえちゃんは、ハギビスさんの友人の住所と電話番号と、ウチの住所と電話番号などを書いた紙を交換した。

「あつ、うちに電話するときは、かならずあたしを呼び出して。月波久子だから。」

「ありがとう。」

そういって、ハギビスさんはぼくら一行と別れた。

かくれ家

かくれ家

すでに夜だった。

ぼくら四人は、築二十五年のおじいさんの家を見つめていた。

二階建ての和洋折衷の一戸建てだ。屋根は茶色の洋風

のかわらだが、いまは暗くてよく見えない。垣根のむこうの庭は、おじいさんの趣味を反映していて広く、地面に窓からもれた明かりがさしていた。

こうしていてもしかたがない。おねえちゃんは音がないようにドアを開けて、ぼくらの手まねきした。そのまま全員で二階にあがろうとしたときだった。

「帰ったの？」

台所のほうからお母さんの声が聞こえた。ぼくらはビクツとからだをふるわせた。だが、もつとおどろいたのはその次だった。

「チャコ！ この不良めが！ 遊び歩くのはいいが、弟を連れ歩くんじゃない！ ケンジを巻きこむな！」

うわつ、すぐその居間におじいさんがいる。おねえちゃん、あんまりびくくりしてかべにはりついたままだ。

「おねえちゃん。こうなったら……。」

「そ、そうか。それでいくわ。」

おねえちゃんは深呼吸して、つとめて明るい声を出した。

「はい、はい、いま帰りましたあ。ケンジもね。」

ぼくら四人は階段をのぼった。もう静かにのぼってもしかたがない。

「人数をごまかさなげや。」

「わざと音をたてて、足並みそろえてのぼるのよ。」

おねえちゃんの合図で、いち、に、いち、に、と四人は階段をのぼった。登りきったところで下から声が聞こえた。

「うちの階段、あんなに長かったかな？」

階段をのぼったら、ぼくの部屋のよこを通り、つきあたりがおねえちゃんの部屋だ。せまい部屋だが、とりあえず、ぼくらはそこに避難した。

「わつ、レイコ。あたしのスカートに腰かけないでよ。」

「あら失礼。」

天音さんがおねえちゃんのイスからベッドに移動した。

「レイコってば、あたしのトレーナーの上に……。」

「ええい。どこに座ればいいのよ。」

おねえちゃんの部屋はどこもかしこも衣類で散らかっている。毎朝、何を着ていくかで、とつかえひつかえしていくうえに、自分でかたづけらるなんてことはほとんどない。

ぼくはベッドの上をかたづけ、天音さんとマリキツトを座らせた。さて、これからどうするべきか。

「ちよっとケンジ。」

おねえちゃんが、ぼくをろうかにひっぱりだした。

「この状況をなんとかしなくちゃいけないわ。」

なんとかしらったって、どうすればいいんだ。ろうかの反対のふすまを開ければ、広びろとした茶室があるけれど、そこはおじいさんのお氣に入りの場所だ。

その時、ぼくの口からあの神聖な音声がもれだした。

「オー………」

「おねえちゃんの胸の『カウストウバ』が緑色に光った。

「シツディ・マハー・シツディ……、タット・トウバム・アシ・ハレー・ヴィシユヴァカルマン（建築の神）！」

地震のようにゆかがゆれたような気がした。空間がゆがむ感覚が二度、三度してから、おねえちゃんもぼくもわれにかえった。

階段の下からテレビの音が聞こえ、ぼうつとしたあかりがろうかを照らしている。

「なに？ なんなのよ。いまのは。」

「さあ……」

ぼくがそういいかけたとたん、おねえちゃんが声をあげた。

「ああっ！」

「おねえちゃん、声が大きい。」

「見て！ これ！」

目のまえに見知らぬドアがあった。本だなぐらいの小さなドアだ。ぼくはこんなドアは知らない。すぐ左がぼくの部屋だし、すぐ右、つきあたりがおねえちゃんのへやだ。この小さなドアの場所には、ぼくの部屋とおねえちゃんの部屋をしきるかべがあるはずだった。

「開けるよ。」

おねえちゃんは、ごくりとつばを飲みこみながら、その小さなドアを開けた。

ドアを開けると、そこは奇妙な空間だった。

石でできたゆかに、赤い複雑な模様のじゅうたんがしいてある。正面には出窓があり、両側のかべには、深い森林とヒマラヤみたいな雪山の絵がえがかれている。天井には長くうすい布が、二重、三重に交差しており、ところどころから金色の鎖にぶらさがってランプがのぞいていた。全体に派手で、なんとというか――

「三軒茶屋のカレーシヨップみたい。」

おねえちゃんがバツサリといった。

ベッドというより寝台といったほうがふさわしいものが、部屋の三分の一を占めている。これなら泊まれそう

だ。

さつそく天音さんたちをこの部屋に連れてきた。マリキツトの表情は変わらないが、天音さんのほうはあつげにとられてる。

「なんなのよ、これ？ こんな部屋がある家には見えなかったけど。」

そのことばでぼくは気がついた。

「おねえちゃん。確かめておかなきゃならないことがあるよ。窓のそとを見てみてよ。」

おねえちゃんは、両側に神殿のような柱がついている小さな出窓を開いた。

「見たけど……別に、普通のけしきだよ。」

そこでぼくはおねえちゃんをつれ、階段を下りて家の外に出た。

「見てよ。おねえちゃん。」

「あつ、ない！」

そうなのだ。外から見ると、ぼくの部屋の窓とおねえちゃんの部屋の窓しか見えないのだ。

「これ、どういふこと？」

「理屈なんかわからないよ。」

「とにかく都合がいいってことね。」

「都合？」

「ケンジ。よく聞きなさい。」

おねえちゃんがまじめくさつた顔をした。

「ハギビスさんからすぐに連絡がくるとは思えないの。あたしはあのふたりを、何日でもこの家にかくまうつもりよ。じいさんに絶対ないしよで。」

「ないしよで？ できるかな。」

「やるよ。」

おねえちゃんは決然としていった。

最初のピンチは夕食時におとずれた。

おねえちゃんは、わざとらしくお母さんを手伝って、夕飯のおかずをこっそりタッパーに入れることに成功した。さらにパンを何個かくすね、ペットボトルのウーロン茶を持って、二階へ上がろうとした。

ところがおじいさんがついてくるのだ！

「あれ？ 夜に二階へ行くなんてめずらしいね。」

おねえちゃんは、できるだけ平静をよそおって聞いた。

「フン。自分の家でどこへ行くこうとわしの勝手だ。」

階段をずんずんついてくる。足腰は弱ってないらしい。

二階のろうか、おねえちゃんがうろろうろしていると、おじいさんが不審がった。

「なぜ、部屋にはいらん？」

「いっしょに勉強するの。」

おねえちゃんはウソをついて、ぼくの部屋にもぐりこんだ。

ぼくらはドアのすきまから、おじいさんの様子をうかがった。おじいさんは例の小さなドアを見て、ちよつと首をかしげていたが、ふすまを開けてそのまま茶室に入っていた。

「何をしてんのかな。じいさん。」

おねえちゃんは動きようがなくなつてじりじりしている。

「きつと書道だよ。」

おじいさんにはそんな趣味があり、コンクールで入賞したこともある。

一時間ほどしてから、おじいさんが出てきた。また例の小さなドアを見て、ちよつと首をかしげてから下へおりていった。

足音を確認してからぼくらは例の部屋に飛びこんだ。

「おつそーい。もう、おなかぺこぺこよ。」

天音さんが不満をいった。

「こつちにはこつちの事情があんのよ。」

おねえちゃんは、ぜーはーいつている。

天音さんたちが食事しているのを見ながら、おねえちゃんはさつきのことを話題にした。

「入り口が問題だよね。」

「ドアが一つふえていても、あんがい気づかないもんだと思っただけ、いつまでもつか。」

「それよ。」

カモフラージュが必要だということになって、ぼくの本だなを利用することにした。本だなには、『少年少女世界名作全集』がずらりと入っている。それを一冊ずつとりだし、本体と紙箱のケースに分ける。そしてケースだけもとのように本だなにおさめるのだ。

おねえちゃんとぼくは、軽くなった本だなを、例のド

アの前まではこんだ。ちょっと見ると、重たい文学全集のやらんだ本だなが置いてあるようにみえるが、じつさいは中身がからなので、片手でも動かすことができた。例の部屋のドアは内びらきなので、ドアを引いて開けてから、本だなをずらして外に出ることもできた。これ以後、パパやお母さんやおじいさんに、なぜこんなものをろうか置いていたんだと聞かれたが、おねえちゃんはそのたびに答えたものだ。

「あたし、なんか最近、ブンガクに目覚めちゃってー。あたしも自由に読めるようにろうかに置いてもらったのよ。」

調子よさそうな返事だが、おねえちゃんの内心はどきどきだったろう。一冊とりだされたら、中身がないことがばれてしまうのだから。

秘密の生活

やがて春休みに入り、ぼくらにとって奇妙な、本当に奇妙な日課が始まった。

二階にも小さな洗面所とトイレがあるので、とりあえず朝はそこで用をすませてもらう。したがって最初の問題は朝食をどうするかということになる。

おねえちゃんは、毎朝パンと牛乳をくすねるのが仕事になってしまった。異様な減り方にお母さんが疑問をもった。

「なんだかすぐくパンが減るのよ。二倍はやく減ってるわ。」

「それはもう、食べざかりなの。あたしー。」

「以前はダイエツトとかいってたのにねえ。」

「健康が一番だってわかったの。えへへ。」

こうして苦労してはこんだ食事も、天音さんには不評だった。

「クロワッサンとベーコンエッグが食べたーい。」

「無茶いわないでよ。これだって苦労してんだから。」

「ああ、私はとらわれのお姫様みたい。白馬の騎士はあらわれるのかしら。」

「ベーコンエッグを持って？」

「そうよ！」

朝食が終わり、パパやお母さんが仕事に出かけると、おじいさんがテレビの時代劇を見る時間になる。

この時間を使って、少しはからだを動かしたほうがいいというところで、体操をすることにした。この謎の部屋——「かくれ家」とよぶ——は、石づくりのため震動がつかわらない。天音さんの発案でヒップホップダンスをした。ごく静かに音楽をかけてみんなで踊るのだ。ぼくもむりやり踊らされたが、おねえちゃんに「タコおどり」とよばれてしまった。

昼はお母さんがパートに出たままなので、家にはおじいさんしかいない。この時は、お母さんが作りおきしてくれたおかずを、どうどうとくすねてくる。

午後、天音さんはマリキットに絵本を読んできさせる。「セーラはいいました。」

『まあ、ねずみのメルキセデリが子どもたちをつれてきたわ。』

そうです。かわいらしい子どもたちが、ちよろちよると出てきたのです。

そのとき、こつこつとかべをたたく音がしました。

『あら、ベッキーがよんでるわ。』

召し使いのベッキーは、いつもセーラの心配をしているのです。

『ああ、セーラお嬢さま。おさびしくはありませんか。』

ベッキーは、セーラのために泣いていました。

セーラもこつこつとかべをたたきました。

『安心してベッキー。わたしにはメルキセデリがいるからさびしくないわ。』

セーラはそう伝えたかったのです。

でも、召し使いのベッキーはセーラが気のどくでなりませんでした。

『お気のどくなセーラお嬢さま。ベッキーはいつでもあなたさまの味方でございます。』

ベッキーは心からセーラをしたっていたのです。

聞きながらおねえちゃんは、ぼりぼりと頭をかいた。

「なんなのよ。あれは。」

「わからないらしい。」

「小公女だよ。おねえちゃん。」

「うえーっ、あの、金持ちがピンボーになつて屋根裏部屋にすむという……。」

うるさいわねえ、と天音さんがいった。

「お茶でも持ってきてよ、ベッキー。」

「だれがベッキーよ！」

マリキットがねむってしまうと、それぞれの部屋に分かれて勉強することになる。そういうたてまえだが、おねえちゃんはマンガでも読んでるんだらう。

夕方、家族全員がそろってこの時間は、かなりあぶない。夕食をくすねるのはひと苦労だ。ひと通り食事がおわったあと、おねえちゃんは洗いのを手伝う。最初のうちはお母さんがたまげた。

「あ、あ、あなたが自分からお手伝いするなんて、どうしたの？ 熱でもあるの？」

この世の終わりでもきたようなおどろきかただった。とにかく、さつさとかたづけを終わらせて、お母さんを台所から追い出す。そうしてから残りものをタッパにつめるのだ。

しかし残りものは残りものだ。やはり天音さんは不満だった。

「ああ、寝てるあいだに暖かいスープとすばらしいごちそうが用意されていないものかしら？ ねえ、ベッキー。」

「そのベッキーつてのやめてよ。」

「おとなりにインドのダイヤモンド王とか住んでない？」

「いないよ。そんな人。」

「残念だわ、ベッキー。」

「やめてつてば！」

おねえちゃんはキレそうになった。

「そうねえ。あなたのことばかりベッキーとよぶのは不公平ね。こうしましょう。私のことは『セーラお嬢さま』つてよんでいいわ。」

おねえちゃんはキレた。かべに描いてある何かの絵を思いっきりけとばしたのだ。しかしこのへやは石でできているので、おねえちゃんは足をくじいてしまった。

「痛い、痛いー。」

「神様をけとばしたりするからだよ。」

「神様？ あ……。」

ヒマラヤの雪山の絵のよこに、あぐらをかいて瞑想している、ぼさぼさ髪の男の人の絵が描いてある。

「うわあ、なんかおつかかなそうな絵だね。」

ほとんどはだかで、首とか、からだのあちこちにコブラを巻きつけていて、肌の色がなんだか青っぽい。

「おねえちゃん、これはシヴァ神だよ。」

「シヴァア？」

「日本でいうと、『大黒天』なんだって。三軒茶屋のカレーショップと同じ絵があつたんだ。死と破壊をつかさどる、力の強い暗黒の神だそうだよ。」

「ふうん。」

夕食が終わるとお風呂だ。当然のことながら、これももつとも危険なことだ。天音さんはアロマオイルを用意したりして、なんだかのんきだが、こちらはたいへんだ。四人が、ぬきあししあしで一階におりる。ぼくはだれかこないか見張りだ。おねえちゃんは更衣室に入り、いかにも自分が入浴してふりをする。そのあいだに天音さんとマリキッドが浴室に入る。

「ぬるいわよ、ベッキー。」

「そりやそうよ。パパが入ったあとだもん。」

「なんだか、ばっちいわね。」

「だったら、シャワーだけにすれば！」

口げんかの果てに、おねえちゃんは更衣室を飛び出してしまった。

「ケンジ！ あと、あんたにまかせろ。」

「かなり怒っている。」

「しかたがないので、ぼくが更衣室に入った。」

「ベッキー。怒ってるの？ 短気はそんよ。」

「ベッキーは用事で席をはずします。」

「うわあー……」

ぼくは声にならない悲鳴を上げた。天音さんがすっぱだかで立っているのだ。

「ケンジ君……なの？」

「ぼくはもう、馬鹿みたいに首をたてにふっていた。」

「よっぽどチャコを怒らせちゃったのかしら。」

「それはいいから、とびらをしめてくれ！」

とびらが閉まったとき、ぼくは生涯最大のため息をついていた。心臓が飛び出しそうになるとはこのことだ。

一瞬だったのに、やたらと長く感じた。湯気のなかの天音さんはすぐキレイで、ぼくの目にしつかりと焼きついてしまった。おねえちゃんはよく、下着すがたでのし歩くことがあるが、まるで比較にならない。おねえちゃんはおねえちゃんだ。

就寝前、ほの暗いランプの明かりの下で、天音さんは、またしても小公女の絵本をマリキッドに読んでやる。

「セーラとベッキーは部屋のとびらをあけました。」

『ああ、やっぱり夢じやなかったのね。』

だんろの火はあかあかと燃え、テーブルにはすばらしいごちそうがならんでいました。

『セーラお嬢さまあ、おいしくておいしくて涙が出ます。』

『あらあらベッキー、ごちそうは逃げなくてよ。』

セーラは王女さまのようにわらいました。

ふたりを見まもるおねえちゃんは、ふきげんなままだ。

「ほかの本は読まないの？」

「これが一番、気に入っているのよ。」

実際、そのとおりで、マリキッドはすぐにねむりにつくのだ。

天音の日記

桜の花が、あちらの木こちらの木とふえてきた。気温もだんだん上がっている。世間の人びともなんとなくウキウキと楽しそうで、こころのなかはもう春だ。しかし、「かくれ家」のほうでは、おねえちゃんと天音さんの仲が険悪になっていった。

きつかけはというと、天音さんがこういったからだ。

「ねえ、ベッキー。なんだか部屋にほこりがたまってきたわ。そうじしてくれないかしら。」

いきりたつおねえちゃんをおさえて、ぼくは一階から掃除機を持ってきた。天音さんたちにはぼくの部屋にうつってもらい、ぼくらはそうじをはじめた。

「これなんだ？」

おねえちゃんが一冊のノートを手をしている。

「どこにあつたのさ。」

「ベッドのまぐらの下。」

「おねえちゃんも平然と聞いた。」

「まずいよおねえちゃん。プライベートの侵害になるよ。」

「なあにがプライベートよ。あたしらにそうじをさせといて。見てやる見てやる。」

おねえちゃんはノートをバラバラとめくった。

「うはは。これ日記だよ。おもしろー。」

「まずまずまずい。」

だが、最初はやにや読んでいたおねえちゃんの表情

が変わり、しだいにけわしくなってきた。あきらかに怒っている。

「あんのヤロー。」

「どうしたのさ。」

「ケンジ。これ読みなさい。」

「えっ、いいよ。」

「読めたら読め！」

おねえちゃんに強引に押しつけられて、ぼくは日記を読んだ。

○月×日

くだらない人が多かったけれど、こんな状況になってしまおうと、たいていの人は懐かしく思い出されます。来学期は会うことはないと思うから。

でもエリは……まあ、あの子も悪い子じゃないのよね。

ただちよつと下品なだけなのよ。サクラは、もつと勉強したほうがいいわ。好かれる性格じゃないから、頭だけはいい子だわ。私のあとを歩いて歩いてたけど、自分ひとりでもできることがあるのかしら。ハルカは田舎くさいわね。英語までなまることはないんじゃない？

テツヤは足がはやいだけとりえの子ね。ラブレターは面白かったけど幼稚な文章だわ。ミノルは中学生にもなってアニメばかり見てるオタクね。私はいいけどみんなはキモいっていつてる。アツシは気が弱くて、私のそばでうろろしてたっけ。好きなら好きっていえばいいのに。ユウキは便利な子よね。いろんなことを知っている。でも、ただそれだけよ。コウタロウはおっかしいの。あんなでつかいからたして、耳まで真っ赤になって、好きですなんて。ごめんない、私の趣味じゃないわ。みんなみんなさようなら。もう会うこともないでしょう。神さまのおめぐみがありますように。

○月×日

かくれ家での生活は単調でつまらないものです。ベッキーは食事をはこんできてくれるけど、おせじにもおいしいとはいえませぬ。あ、ベッキーは本当はチャコっていいです。私が勝手にベッキーってよんでるの。このか

くれ家につれてきた子だけど、同時に私たちが自分の家を追い出された原因をつくった子。

それにしてもチャコって単純ね。怒らせようとすると簡単に怒るんだもの、あんなあつかいやすい人はいないわ。顔はケバいし、変なアクセやコスメで身をかためているのは、ひよっとして自分に自信がないのかしら。うーん。チャコは頭がわるいから、そのせいよきつと。その場のいきおいで行動するのは見てて面白いけど、ケンジ君を虐待するのはよしたほうがいいわ。

あ、ケンジ君というのはチャコの弟です。けっこうかわい子。頭もよさそうだし、ほんとうにきょうだいなのかしら。でも、ちよつとオタクが入ってるところがあるから、将来が心配です。

ああ、マリキツも私も、このせまいところからはやく解放されて、お父さまのバランガイ・ルンパンのお屋敷に行きたいものだわ。その日を信じて耐えましょう。神さまのおめぐみがありますように。

○月×日

バランガイ・ルンパンのお屋敷についてあれこれと考えてみます。そこは広い広いお屋敷で、ベッキーみたいな召し使いが何人も働いているの。庭には大きな池があって、浮いているハスの葉の上でカエルが鳴くの。大きな家をヤシの木がとりまいて、涼しい木かげが窓の上をゆれているんだわ。

あつ、ベッキーがきたみたい。ちよつと中断。

ベッキーったら、雑誌のクイズの答えを教えてください。馬鹿みたい。だってあんまり簡単な問題なんのだもの。当選すれば一万円当たらしいけど、正解者ばかりで絶対当たらないわ。それでもうれしそうにハガキを書いているのが単純というか欲の皮がつっぱってるというか……。

ああ、悪口はよしませう。マリキツと私によくしてくれているのは事実なのだから。多少の人間の欠陥には目をつぶるべきだわ。そういえばこの部屋もほこりっぽくなってきたわね。ベッキーにたのんでそうじしてもらいませう。

「どう思う?」

おねえちゃんは悪鬼のごとき形相でぼくにせまった。

「うーん。」

こまってしまった。しんらつというかの確というかなんというか。ただ、ちよつと気になることがあった。

「バランガイ・ルンパンってなんだろう。」

「どうせまた、てきとうに夢みたいなこと書いてるんだよ!」

おねえちゃんは鼻から息をふきだした。

「どうしてくれよう!」

ぼくは必死で止めたのだ。だけどおねえちゃんは、日記の上にあるこれとらくがきしてしまった。こんなぐあいだ。

ぼーか、ぶーす、調子こいてんじやないぞ。あたしが食べものはこんでこなかつたら、あんた飢え死にだぞー。文句をいえる立場か、よく考えろ! チャコより。

その日、そうじが終わったあと、夕食をはこんでいたときの「かくれ家」の空気たるや、それまでで最悪のものだった。

日記のことこそ口にしなかつたけど、天音さんは冷たくそつぽをむいていた。おねえちゃんもだまりこくって、ふたりは目に見えない火花をちらしているようだった。

夜、お風呂に入れたために、おねえちゃんは天音さんたちを無言でつれだした。ぼくは最後にのこつて「かくれ家」のとびらをかくそうとしていたが、ふと中をのぞくと、出窓にノートが置いてあるのに気がついた。見ると、読んでくださいとばかりに開いて置いてある。こんなことが書いてあった。

あらベッキー、この日記を読んでくれてうれしいわ。あなたには本当に感謝してるのよ。文章ならいいにくいこともいえるわね。実はいままであなたにいえなかつたことがあるの。あたし、あたし、マンゴーが食べたいの。買ってきてくださる? 腹心の友セーラより。

天音さんもいい根性をしている。どうしたものか迷ったが、ぼくはノートをおねえちゃんに見せることにした。

「〇××〇×〇!~~~~××〇!」

おねえちゃんは更衣室で、声を出さずに怒りまくっている。

しばらくゼーハーいつていたが、ぼくにえんぴつを要求してこんなことを書いた。

ゼータクいうなアホ! てめーなんぞリンゴのしんとかミカンの皮でじゅうぶんじゃ! マンゴーだとお、ここを出てから腹いっぱい食え!

ぼくは日記をもとの場所に置いたが、これはどうなるんだろう。

つぎの日に、ぼくがおつかいから帰ってくると、なんとぼくの部屋のつくえの上に、問題の日記が置いてあった。

いやあね、ベッキー。あなたにそんなことをいう資格なんてないことよ。だってあなたのせいで、私たち姉妹はこんなことになったんですもの。毎日毎日せまい部屋にとじこめられて、楽しみといたら食べることだけ。みんなあなたのせいなのよ。ちよつとした幸せをわけてくれてもいいと思うわ。きつと神さまもよろこんで、罪をゆるしてくださるわよ。

おねえちゃんに見せると、これはもう怒り爆発寸前といった感じだったのだが、ぼくはなだめた。

「まあ、おねえちゃん。天音さんのいうことにも一理あるんだから、なんとかしらうよ。」

おねえちゃんは、ふーふーと深呼吸して怒りをおさめた。

「とりあえず、お母さんに当たってみる。」

気がすすまないようすで行動を開始した。

お母さんにマンゴーの話をする、意外なことに買った。

てきてもいいことになった。パパがそばにいて、自分も食べたいといいたからだ。おねえちゃんとはぼくは自転車をとばして、高級スーパーに行つてマンガーを買ってきた。家にもどると、ぼくたちは自室で食べるからとウソをついて一個確保した。もちろん「かくれ家」へ持っていくのだ。

天音さんは大満足だった。

なれた手つきで皮をむき、たてに三つにスライスすると、一つをマリキットにやつた。表情を変えないマリキットも、こころなしかおもしろいそうによるこんで食べている。天音さんはもう一つを食べながら、ほう……つと息をついた。

「やっぱおいしいわ。いつも食べられるといいのにな。」
上品にほほえんだ天音さんにくらべ、おねえちゃんのほうはちよつと品がなかった。ふたりが食べるのをよだれをこらえながら、じつと見ている。

「あたしにもちようだいよ。」

「がまんできずにおねえちゃんがいった。」

「あら、まだ食べてなかったの？」

「ホントはあたしたちの分なのよ、それ！」

「ほとんど悲鳴みたいな声だ。」

「ごめんさい。食べおわつちやつたわ。」

「まだあるじゃない！」

いじきたないおねえちゃんは、テーブルの上のこつたも一つのスライスを指さした。

「それはだめよ。ベッキー。」

「だれがベッキーだ！」

おねえちゃんのはのこつたマンガーにかじりついたが、へんな顔をした。

「それは種なのよ。でも少しは食べるところがあるから、どうぞ。」

そういつて天音さんは鈴のなるような声でころころと笑った。

ここでぼくは重大なミスを犯した。つられてちよつと笑ってしまったのだ。おねえちゃんは見逃さなかった。

「ちよつと、ケンジ！ あんたどつちの味方なのよ！」

これはこまつた。そんなことをいわれても……。すると天音さんがフオローするつもりで火に油をそそいだ。

「あらあ、ケンジ君をこまらせるもんじゃないわ。彼にも立場つてものがあるもの。内心でどう思おうと、こわ

い姉には逆らえないものよ。」

「ちよつと何よそれ、あたしが無理矢理ケンジにいうことをきかせるみたいじゃない。」

「ちがうのかしら？」

「ちがうよ！ あんたこそ、へんな色気でケンジをたぶらかさないでよ。」

「私はケンジ君が気に入ってるの。」

「ぬけぬけと！ ケンジ！ どつちか選びなさい！」

「ホントのこといつてみたら？ 私が好きだって。」

「うそよ！ あたしよね。」

ぼくは頭をかかえてしまった。マリキットがあきれたように見上げている。とにかくあとがこわいので、うなだれたままおねえちゃんのほうを指さした。

「やつた……。」

おねえちゃんがよろこびの声をあげかけたとき、天音さんがぼつりといつた。

「私のハダカを見たくせに……。」

うつむいてすこし赤くなっている。

おねえちゃんが爆発した。

「あんた、なんてことを！ 逃げるなケンジ！」

これ以上その場にいられない。ぼくは一階に逃げおりました。

階段をおりて居間につけこむと、台所のほうからお母さんとパパの声がきこえてきた。

「最近、食べものがよく無くなるのよね。どういうことかしら。」

「うーん。ひよつとして……。」

「なにか思い当たるの？」

「ほら、子どものころ、やつたじゃないか。犬とか猫とかこつそりと飼つたりして。」

「わしや絶対、ゆるさんぞ！」

おじいさんの声だ。

「おとうさま。まだそうだと決まつたわけじゃありませんよ。」

「そうだよ父さん。子どもたちに聞いてみないと。」

「なら、おまえたちが追及しろ。かならず吐かせるんだ。」

「そんな頭ごなしに……。」

「手ぬるい！ おまえらの教育はなつとらん。」

おじいさんは怒りまくっている。ぼくはあわてて二階にかけもどり、「かくれ家」にいた

おねえちゃんたちに事情を説明した。天音さんたちには絶対に音をたてないように指示してから、おねえちゃんもぼくも自室にこもり、勉強しているふりをした。五分ほどしてから、ドアをノックする音がした。

「ケンジ。ちよつといいか？」

パパだ。ぼくはろうかに出た。

見ると、おねえちゃんも、お母さんに連れ出されてろうかに出ていた。おじいさんもいて、するどい目で、しきりに周囲に目をくばっている。

おねえちゃんとぼくは、ならんで質問をうけた。パパがせきばらいをした。

「君たち。何かかくしていることはないか？」

じつと、ぼくたちの目をみつめる。

おねえちゃんもぼくも沈黙してしまった。これはまずいと思った。だまっているのは、かくしごとを認めることになる。

やがておねえちゃんは、なんだかからだをくねらせるようにしていった。

「かくしてるっていうか、あたしいままで、いおうとしてもいえなかったことがあるの……。」

おねえちゃんは、ぼつりぼつりと語りだした。おねえちゃん、まさか。

「どつてもいいにくいんだけど……。」

おねえちゃん！

「パパ、太つたね。」

「間食つて太るんだよ。健康にもよくないし。大事なからだなんだから……。」

パパはあうあうと口を動かしているが声にならない。お母さんは横目で冷ややかにパパを見た。

さすがはおねえちゃん。たいした高等テクニクだ。これでお母さんは、無くなった食べものは、パパが間食したのだからと思つたにちがいない。パパにはどつても

気のどくだし、正直いつて、ウソをつくのは気分のいいもんじゃない。しかしこれはしょうがないことだと、ぼくは自分を納得させた。

それにしても気になるのはおじいさんだ。おねえちゃんとパパの、このやりとりのあいだ、じい……と本だなを見て、何ごとか考えこんでいる。ぼくの胸に不吉な予感がひろがった。

広がる疑惑

桜の花が八分咲きになっても、おねえちゃんと天音さんはまだケンカしていた。

やれ、レンタル屋でCDを借りてこいだの、おやつのかーキは高井堂にかぎるだの、一つ一つはくだらないことだ。しかし、つまらないことでもストレスがたまるとシヤレにならない。そういえば、おねえちゃんの服を、天音さんが勝手に着たなんてこともあった。おねえちゃんには怒ったが、天音さんのほうが着こなしがいいのは明白なので、おねえちゃんのプライドは傷ついた。

ぼくはそういう争いはさけて、自室のパソコンをネットにつなぎ、外国人のことをあれこれとしらべていた。

ハギビスさんは不法滞在だそう。不法滞在というのは、国が許可した期間を過ぎても日本にとどまっていることで、これは立派な犯罪だ。つかまつたら、普通の監獄とはちがうらしいが、とにかくくろくやに入れられる。

しかし、ハギビスさんは日本人の妻と結婚している。日本に住んでもよさそうなものだが、それでも不法滞在なのは変わらないのだそう。住み続けるには特別の許可がある。ここでややこしいのは、奥さんがどこかへ出て行ってしまったことだ。それでも許可がもらえるのだろうか。

天音さんのことを考えると、天音レイコの天音はお母さんの姓なんだろう。母親が日本人だから、天音さんは日本の国籍を持つことになる。もちろん日本に住める。

マリキットになると、もっと複雑だ。母親は日本人らしいが、届けも出さずに出て行ったとなると、それを証明できるだろうか？ どうにもわからない。

ハギビスさんは日本人の子どもを育てているわけだから、日本に住み続ける特別な許可をもらえる可能性がある。ところが、許可をもらいに行つて、そのままつかまつちやっした人も多いらしい。おいそれと役所に行くわけにもいかないのだ。

そんなわけで、この一家はどうなつちやうのか、調べてもぼくにはさつぱりわからないのだ。

ぼくが頭を左右にふっていると、ノックもせずドアが開いた。

「ケンジ！ マリキット来てない！」

ケンカしてるはずの、おねえちゃんと天音さんが、そろって青い顔をして部屋に飛びこんできた。

マリキットが行方不明になったのだ。天音さんがトイレのために「かくれ家」を出たあとで、どこかに行つたらしい。

「茶室にはいなかったの？」

「いないの。二階にはどこにもいない。」

広びろとした茶室にはかくれるところなんてどこにもない。

「すると一階にいるんだろうか。まずいよ、おねえちゃん。」

「あんたがちやんとつないでおかないからよ。」

「犬といっしょにしないで！」

ぼくらがいい合つていると、あの、ハーモニカの音が聞こえてきた。

『家路』だ。」

「ドザルヴォークの……。」

「ドヴォルザークだよ。おねえちゃん。」

「マリキット！」

マリキットは庭にいた。入り口の門の上に腰かけて、夕日をあびながらハーモニカをふいているのが見える。

「連れもどさなきや。」

「しかし、どうやって？」

その時、一階の玄関が開いたらしく、だれかできてきた。あのうしろすがたは、よりによっておじいさんだ。ぼくらは息をのんだ。

「こりやつ！ うちの門に腰かけるな！」

ハーモニカの音がやんだ。マリキットがゆつくりとこちらをむいた。おじいさんはマリキットの顔を、じいーつと、無遠慮にのぞきこんだ。

「おまえ、日本人じゃないな。どこの子だ？ うちはどこだ？」

マリキットはゆつくりとこちらを指さした。あわててぼくらは窓の下にかくれた。

「馬鹿をいうな。あれはわしのうちだ。へんな子どもだわい。とにかく、ここから立ちされ。シツシツ！」

おじいさんは、犬でも追いはらうようにマリキットを

門からどかせた。

しばらくがまんの時間がつづいた。おじいさんが家に入って外を見てないことが確認できないと、動くわけにはいかない。やがて一階でおじいさんの気配がした。どうやらだいじょうぶだ。

「行くよ、ケンジ！」

おねえちゃんは、音をたてずにすばやく階段をおりた。ぼくは必死でついていった。風のように玄関をとおるぬけ、そとに出ると、コンビニのそばでマリキットがゆらゆらと歩いていった。

「マリキット！」

おねえちゃんが、マリキットの肩をつかむと、マリキットのほうもおねえちゃんの服にしがみついた。表情がまったく変わらないのだが、これはよろこんでいるのだろうか？

問題はどうかやって家にもどるかだ。おねえちゃんがひとりでも門のところまで行って、だれか見てないか確認した。注意すべきは通行人じゃない。近所の人やぼくらの家族、とくにおじいさんだ。

合図を見てから、ぼくはマリキットを連れて、すばやく玄関にたどりついた。そのまま静かにとびらを開ける。オーケー、だいじょうぶだ。例によってぬき足さし足で階段をのぼろうとしたとき、ぼくは心臓が止まりそうになった。寝室にいたおじいさんと目が合ったからだ。

ほんの一瞬だったが、おじいさんはびつくりした顔をしている。ぼくはそのままスローモーションで階段をのぼった。登りきり、「かくれ家」に入ってから、いまあったことをおねえちゃんに話した。

「あんたもなの？」

おねえちゃんのほうも、失敗したという顔をしている。やはり階段の登り口で、台所のお母さんにすがたをみられたというのだ。これは大変なことになってしまった。ただではすまないだろう。

夕食の時間は奇妙なふんいきだった。

パパはひとりで陽気にしゃべりまくり、おやじギャグを連発しては台所を沈黙させた。おじいさんもお母さんもなにもいわないのが、かえって不気味だった。

食事のあとで、それとなくおじいさんを観察していると、和室のほうで、なにやら図面らしきものにとらめっこしている。

そこへパパが通りかかった。
「なに、やってるんです？」

「おい、この家になにか、かくし部屋みたいなものはなかったか？」

「まさか、そんな。」

パパは笑いだしたが、おじいさんはあくまで真剣な顔だ。あれはきつとこの家の図面なのだろう。おじいさんはにらんだままだ。

「外人の子どもというのは、みにくいもんだな。」

「は？」

パパが不思議そうな顔をした。

ぼくは不安にたえられなくなり、二階へあがった。す
るとお母さんの声が聞こえてきた。

「へんだへんだと思ってたのよ。」

ついにばれたのだ。食べものをかくし持つて階段を上
がったおねえちゃんが、お母さんにつかまってしまった
のだ。おねえちゃんは手に、パンやタッパーやペットボ
トルを持ったまま、お母さんの追及をうけている。

「ケンジ。あんたもいらつしやい。」

お母さんは静かに、そしてきびしい口調でぼくに命令
した。ぼくらはならんで、お母さんの取調べを受けるこ
とになった。

「いったい、この食べものをどうするつもりなの？ 答
えなさい、チャコ！」

おねえちゃんは、ひたすら首をすくめて何もいわない。
時間だけがたつていく。ぼくはもう、このまますべて
をお母さんに話してしまおうかと思った。お母さんなら
事情を話せば、許してくれるかもしれない。お母さんは
おじいさんとはちがう。味方になつてくれるんじゃない
だろうか？ ぼくのあたまはぐるぐるまわった。

「あなたがたが、自分でいつてくれるのを期待したんだ
けど……。」

お母さんはかぶりをふった。

「こうなつては仕方がないわね。」

お母さんは、おねえちゃんの部屋のドアを開けて中に
はいった。しばらく考えてから、クローゼットやベッド
の下をのぞきこんだが、だれもいない。

お母さんは首をひねり、こんどはぼくの部屋にはいつ
た。やはりあちこち調べたが何もなし。ただ、ベッドの
下をのぞかれたときはひやりとした。『少年少女世界文学

全集』の中身を押しこんであるのだ。それがなんなのか
も気づかず、お母さんはいらない本は捨てなさいとだけ
いった。

茶室のほうを開けてみても、もちろんだれもいない。
お母さんの顔に迷いの色が出てきた。それをおねえちゃ
んは見逃さなかった。

「ごめん、お母さん。あたしらしくないんでだまつたの。
。実は毎晩、夜中に起きて勉強してるんだ。おなか
がすくから夜食を用意してたのよ。」

「勉強？ あんたが？」

お母さんは疑わしい顔をした。

「そりゃあ、いつも、ひつどい成績だけど、あたしだつ
て恥ずかしいとは思ってたんだよ。ちゃんと高校にも行
きたいし。」

半信半疑といった顔でお母さんは、おねえちゃんの顔
を見つめていたが、急に思い出したようにいった。

「それじゃあ、昼間いた女の子はだれなのよ。あの子は
何ものなの？」

やはり見られていたか。もうだめだ。ごまかしようが
ない。

「ああ。あの子ならケンジの友だちの子よ。」

ええつ？ おねえちゃん、なんてでたらめを。

「本当なの？ ケンジ。」

お母さんが、ほこ先をこつちへむけた。きびしい目で
ぼくをにらんでいる。ぼくのあたまはまたぐるぐるま
わつたが、口のほうは意外に平静に答えた。

「うん……。友だちの妹なんだ。今日は用事があるから、
ちよつとあずかつてくれて、いわれて、それで……。」

お母さんは複雑な顔をした。信じてるような信じてな
いような、不思議な顔だ。

「まあ、いいわ。今日のところは。」

そういつて、お母さんは階段をおりていった。

ぼくは悲しかった。この一週間で一生ぶんのウソをつ
いたような気がする。決して気分のいいものじゃない。
ウソをつくとの世でえんまさまに舌をぬかれるという、
小さいころに聞かされた話が頭をよぎった。

おねえちゃんもつかれた顔をして階段の下をのぞいて
いた。そして、お母さんがおくの部屋に行つてしまつた
ことを確認してから、「かくれ家」のとびらを開けた。

「おそいわよ、ベッキー。」

天音さんが、からかうような口調でいった。
「いろいろあつたのよ。」

おねえちゃんもつかれてはてしている。

「聞こえてたわよ。もうちよつとどうまい言いわけが思い
つかなかったの？ 夜中に勉強してたなんて、およそレ
ベルの低いごまかしかただわ。」

天音さんがけらけらと笑つたので、おねえちゃんは怒
つて部屋を飛びだしてしまつた。

「なに、怒つてんのかしら。」

天音さんはきよんとしている。

ぼくはひといいなくなつた。

「おねえちゃん、天音さんたちのために、つきたくも
ないウソをついてるんだよ。そこは察してあげたつてい
いと思うよ。」

「それがどうしたつていうのよ。」

天音さんはブイとよこをむいた。

「ウソがばれたところで、こまるのはあなたたちじゃな
いわ。私たちよ。あなたたちのウソなんて、しよせんは
子どもらしいむじやきなウソで許されるだけよ。私たち
はそうはいかないわ。」

もつともな話なので、ぼくは何もいえなかつた。思え
ば天音さんは、ずっと自分と自分の家族を守るためにウ
ソをつき続けてきたのだ。そりゃあ、楽しんでついたウ
ソもあつただろうが、ウソをつくのは天音さんの生活の
一部になつてしまつていたのではなからうか。

「この部屋を出たら……。」

天音さんは窓の外を見ながら、夢みるようにつぶやい
た。

「お父さんのふるさとにいくのよ。」

ふるさとというと、日記にあつた……。

「ランガイ・ルンパンのお屋敷に……。」

いいかけて、天音さんはだまつてしまつた。

ランガイ・ルンパン——このことばが、ぼくのあた
まに残つた。お屋敷は天音さんの想像の産物としても、
ランガイ・ルンパンは実在の地名ではないだろうか。

脱出

「カギが必要だ。」

ぼくはそういった。「かくれ家」はすでに安全じゃない。内側からかぬきみたいなカギをとりつけておけば、いざというときに時間かせぎができるのじやなかるうか。だが、いまのおねえちゃんも冷淡だった。

「あたし、お金ないよ。」

それはぼくも同じだった。あれ以来、食事をくすねるのは、かなり難しくなってしまったので、ぼくらはコンビニやスーパーやお弁当屋さんで、天音さんたちの食事を手にいれていたのだ。おねえちゃんもともとお金のない人だが、ぼくの貯金も残り少なかった。

「レイコたちにお金をださせたら？」

なんてことをおねえちゃんはいう。しかしぼくは反対だった。天音さんたちは、この先どうなるかわからないのだ。お金はできるだけ残しておいたほうがいい。

「家の道具箱になにかあったかもしれない。さがしてみよう。」

「あつそ。」

おねえちゃんは気の悪い返事だ。天音さんとの関係が徹底的に悪化しているのだ。それでもいちはおう義理みたいに食事をはこんでいるが、おねえちゃんももう、つかれはてて、どうでもよくなっているようにみえる。

ぼくは、家の物置にある、大工道具などが入った箱の中に、かぬき型のカギがあるのを見つけた。古いものだがないよりはましだろう。

部屋にかえってみると、おねえちゃんがぼくのパソコンを立ち上げている。

「なにやってんの？ おねえちゃん。」

「ハギビスさんにわたした紙に、ここのメルアドも書いたでしょう。もしかして、メールが来てるんじゃないかと思ってるよ。」

「ああ。きのうまでチェックしてたけど、それらしいメールはなかったよ。」

「今日もないみたいだね。」

そういって、おねえちゃんはため息をついた。いったいこの状態は、いつまで続くんだろうと思っっているのだ。

その時ぼくは、あのことを思い出した。

「バランガイ・ルンバンって、おぼえてる？」

「レイコの記事にあった夢の国とやらでしょ？」

おねえちゃんは、完全に空想の国だと思っっている。

「調べてみるよ。」

やがて検索画面が出てきた。

『一九四五年（昭和二十年）二月から三月にかけて、旧日本軍はフィリピンのバタンガス地方で一万三千人もの住民を殺害した……』

——？ なんだらう？

『すでに日本の敗色は決定的で、米軍の攻撃によって敗走に敗走を重ねていた。日本軍司令官は米軍に通報するフィリピン人ゲリラを恐れ、ゲリラ殲滅の命令を下した。しかし、ゲリラと一般住民の区別などつくはずもなく、日本軍は通過する村々で、老若男女を問わず、あらゆる住民を殺害してまわった。』

——これは半世紀以上むかしの記録だ。日本がアメリカやイギリスや中国などを相手に戦争をしていた時代だ。アジア全体が戦場になって、各地でぼうだいな犠牲者が出た時代だ。もちろん、日本は戦争にまけて焼け野原になったのだ。それは知っているが、日本軍がフィリピンの住人を殺していたなんて話は聞いたこともない。

『多くの人びとは一ヶ所に集められ、銃剣で突き殺すなどして谷川に投げこまれた。惨劇にあった村の中でも『バランガイ・ルンバン』の犠牲は特にひどく、千六百人の住民のほとんどが殺害された……』

——これは本当のことなのか？ ネットの情報はウソが多い。しかし、本当だとしたら……。

「おねえちゃん！」

すぐよこで、おねえちゃんも画面をにらんでいた。

「ケンジ、本当なの？ これ。」

「わかんないよ。けど、本当だとしたら……。」

本当だとしたら、ハギビスさんはこの村の出身ということになる。戦争中日本人にほとんど皆殺しにされた村の人だ。何十年たっても、日本人に対するうらみは、語り伝えられて消えないだろう。そんな人がどういふ事情か、日本に出稼ぎにきて、日本人女性と結婚して子どもが生まれたのだ。

「ハギビスさん、もどつてくるんだらうか？」

ぼくが疑問を口にするのと、おねえちゃんは飛ぶように階下に下りていき、しばらくしてかえってきた。

「電話が通じない。」

ハギビスさんの連絡先の電話が不通になっていたのだ。本当の連絡先なのか、考えたくないことだが、デタラメの番号をおねえちゃんにわたしたのか。

どうなってしまうんだらう。ハギビスさんは、このまま天音さんたちを置き去りにして、どこかへ行ってしまったのだから。

おねえちゃんもぼくも、もう一度、バランガイ・ルンバンについての記事を読みかえた。

『「バランガイ・ルンバン」の犠牲は特にひどく、千六百人の住民のほとんどが殺害された……』

ぼくらは考えこんでしまった。

「とにかく、カギをつけよう！」

おねえちゃんが、あたまでふりふりいった。考えたくないことを考えるのは、おねえちゃんの性に合わない。

「かくれ家」に入ったぼくは、危険だから念のためとだけいって、かぬき取りつけ作業にかかった。日は傾いていたし、部屋のあかりはランプだけだったから手もとが暗い。ぼくは、ペンライトを口にくわえながら、作業をつづけた。

それでも背中に、おねえちゃんと天音さんたちの気配は感じていた。

「なんか、あぶないことでもあるの？ ベッキー。」

「う……、まあね。」

おねえちゃんは、ベッキーとよばれても怒りもしなかった。

「なんだかへんよ、チャコ。かくしてることでもあるんじゃないの？」

「な、なにもないよ……。」

おねえちゃんの声はうわづついている。

カギのとりつけはすぐに終わった。ねじクギで固定しただけのチャチなものだ。ふりかえると、天音さんがおねえちゃんの顔をのぞきこんでいるのが見えた。

「どうして目をそらすのよ。」

「べつに……。あたしって、ほら、シャイだから。」

「およそあなたに似合わないことばよ。」

おねえちゃんは、天音さんに自分の表情を見せたくな

いようだ。まだ何もわかっていないわけでもないのに、最悪の状況を考えてしまうのだろう。

天音さんの視線をさけて、窓の外をながめていたおねえちゃんがつぶやいた。

「あれは……なに？」

家の前の路地の先に、黒っぽいバンが停まっていた。電信柱のかげに、ケータイを持ったあやしい男が、しきりとだれかと話している。車のほうから、四、五人の男がわらわらと飛び出して、門から中に入ってきた。

ぼくたちは顔を見合わせた。

続いて、階段を乱暴に駆け上がってくる音が聞こえた。

「そこです！そこ、本だなのうらだ。」

おじいさんの声が出て、何かを動かす気配がした。

「あつたぞ、ドアだ。」

ガチャガチャとノブをまわす音が聞こえた。マリキットが天音さんのそでをつかんだ。

「ドアをたたく音がした。」

「入国管理局の者だ。ドアを開けなさい！」

「ドアをたたく音はしだいにはげしくなる。」

「ちい、バレたか。ケンジ！マリキットをつれて、ベッドの下にかくれなさい。」

「どうするのよ、チャコ？」

「戦うのよ！戦って、スキを見て逃げるのよ！」

「チャコ……。」

おねえちゃんと天音さんは、緊張して身がまえた。

「ドアをぶちやぶつてくれ！わしが許可します。」

また、おじいさんの声だ。

ドアに体当たりする音がした。

震動がひびいたが、ドアは無事だ。おねえちゃんがぼくを見た。

「つかまったらガス室に入れられたりするのかな。」

もう一度ドアに体当たりする音が出て、かんぬきがこわれた。

おねえちゃんは決死の顔をした。次の一撃で、男たちがなだれこんでくるだろう。

「オー……オー……オー……。」

その時、ぼくの口からあの神聖な音声がもれた。

「ナマッシュヴァーア・マハーカラ（大黒天）・スヴァーハー！」

おねえちゃんの胸の「カウストゥバ」が緑色に光った。

光はおねえちゃんの全身にうつり、一瞬、床がぬけたような感覚におそわれた。

落ちる、みんな落ちる。おねえちゃんも天音さんもマリキットも、そしてぼくも、暗黒の地下へ、どこまでも続くふかい地下へ落下していった。神の声だろうか、大きくてはげしい、ぶきみな笑い声が聞こえた。

桜の木の下で

どのくらい時間がたったのだろう、冷たい暗やみの中でぼくは気がついた。からだは動かない。全身の力を使いはたしたみたいだ。

ぼくの手をちいさな手がつかんでいるのを感じる。たぶんマリキットだ。顔を思い浮かべた。どんな時でも変わらない無愛想な顔だ。でもいまはその顔が見たい。このやみの中で、ぼくはマリキットとふたりきりなんだ。なぜだかそう思った。

ポケットをさぐると、ペンライトがあった。小さな明かりをつけると、やっぱりマリキットだ。ぼくの腕にしがみついできて、とてもあたたかかった。

ここはどこだろう。まわりをてらしてみると、そう広くもない空洞の中にあるのがわかった。かべはコンクリートだ。下もコンクリートで中央に水が流れている。これは地下水道にちがいない。昔、小川だったところに、コンクリートのふたをして、上に木を植えて、ほそくて長い長い公園にしてあるのだ。世田谷にはそんな緑道がいくらでもある。

とにかく出口をさがすために、気力を出してぼくらは歩いた。おねえちゃんはどこにいるのだろう。天音さんはどうなったんだろう。長いあいだ歩いたような気もするし、そうでもなかったかもしれない。暗がりの中で時間の感覚があいまいだった。

ぼくらはやがて、コンクリートの台座のようなものを見つけた。台座の上のほうを照らしてみると、低い天井に金属の円盤があるのが見えた。これはたぶんマンホールだ。

ぼくは台座と天井のあいだのせまい空間にからだを入れて、マンホールのふたを持ち上げようとした。だが、

今のぼくの手ではびくともしない。

（おねえちゃんがいれば……）

くやしがるぼくの腕をマリキットがつかんだ。そうだ。ここはひとりでなんとかしなくてはいけない。

考えたのは、腕の力より足の力のほうが、強いのではないかということだ。ぼくは台座の上に寝そべり、足をひんまげて空間にもぐりこんだ。その足をマンホールのふたに当てて、力いっぱい足をのぼしてみた。すると、マンホールのふたが持ち上がった。そのままふたの位置をずらすと、街灯の明かりが差しこんできた。外は夜だった。

ふらふらと地上に出たぼくらの目の前に、黒い巨大な建物が見えた。高くそびえる二つの円柱には、王冠のようなかざりがついている。

「駒沢の給水塔だ。」

駒沢の給水塔は、このあたりのかくれた名所だった。大正時代につくられた、何十メートルもの高さの、巨大な二基のコンクリートの塔だ。

西洋の城みたいなふたつの塔は、人をよせつけない古風なきびしさを持って夜空の中に立っている。ぼくはあまりにも大きい塔を、ぼんやりと見あげた。

塔のすすけた灰色のかべを見ているうちに、疲れ果てたぼくは猛然と眠くなってきた。草の上に腰をおろし、マリキットの気配を感じながら、ぼくはしだいに眠りのなかに入っていった。

夢の中でおねえちゃんの姿が見える。

暗やみの中で横たわったおねえちゃんの、「カウストゥバ」が、光りつづけている。

おねえちゃん起きる。

ぼくは夢の中でさげんだ。

「うーん。」

頭をふりふり、おねえちゃんが目をさました。

そばに天音さんがいる。

「チャコ。ここはどこ？」

「カウストゥバ」のうつつらとした明かりのなかで、ふたりは立ち上がった。

「わかんない。どこか地下みたいなのところだけ……。」
「いったいぜんたい、どうしたつていうのよ。これは！」

天音さんは混乱した表情で、両手をふりまわして、おねえちゃんに聞いた。おねえちゃん、ただひとこと、

「神の力。」と、

ある意味、本当のことをいった。

「冗談はやめて！」

天音さんは、さげんだ。

「おかしいわよ。私たち、あなたの家の二階にいたわけですよ。それがなんで、こんな洞くつみたいなどころで目が覚めるわけ？」

「あんた、神さまの存在を信じないの？」

「それは信じてるけど……。」

「だったら深く考えなくていいじゃん。それよりケンジたちをさがしましょう。」

おねえちゃんたちは、「カウストゥバ」の明かりをたよりに歩きだした。天音さんはカウストゥバを見て、「懐中電灯にもなるペンダント」だと感心した。

おねえちゃんたちはしばらく無言で歩いた。

しかし、暗やみの中で女の子ふたりがいつまでも押し込まれていられない。

先に口を開いたのは、おねえちゃんだった。

「レイコさ、ここを出たらどうする？」

「え？」

「マリキットを見つけて、そのあとよ。」

「それは、父のところ……。」

「外国に行っちゃうの？」

「わかんないわ。」

ふたりはまた、だまりこんだ。

しばらくしてこんどは天音さんから話した。

「おねえちゃん……。」

「うん？」

「本当はね。私の父は、もうもどつてこないんじゃないかという気がするの。」

やみの中で、おねえちゃんの心はぐらついた。「なぜか……というね、こんなことをいうと、またウソだと思われるかもしれないけど、父は私たちが嫌いなんじゃないかと思うの。」

もう一度、おねえちゃんの心は大きくぐらついた。

「マリキットはね、ほとんど父にかまってももらえなかったのよ。もちろん育ててはくれたけど、愛されていたか

どうかはわからない。だからかしら、私はあの子を大切にしているの。あの子には私しかないんだって、いつも思ってた。」

おねえちゃんは、だまって聞くしかなかった。

「チャコ。マリキットにやさしくしてくれてありがとう。」

おねえちゃんは何もいえない。

「私たち、ふたりきりでも生きていけると思う。」

「そこでことばがとぎれた。」

そのあとで、おねえちゃんが口を開いた。なぜそんなことをいったのか、後になってどうしてもわからなかったそう。

「そうそう、レイコ。あたし、いいそびれてただけよ。さ。きのう、ハギビスさんから電話があったんだよ。」

「えっ？」

「いつになるかわからないけど、必ずむかえに行くっていつてた。」

「それ本当？」

「本当に決まってるじゃない。」

おねえちゃんは、かなしそうに笑った。この時、おねえちゃんはたしかにウソをついたのだ。

その直後、おねえちゃんの耳にハーモニカの音が聞こえてきた。

「聞こえる？ レイコ。」

「なにが？」

天音さんには聞こえなかった。

「カウストゥバ」はどんどん明るくなり、おねえちゃんには、音が聞こえる方向が、はっきりとひとつの道のように見えた。

「こつちだ！」

おねえちゃんは、天音さんの手をひっぱって、反対方向に歩きだした。途中、地下水道が枝わかれしてるところがあったが、ハーモニカの『家路』の曲がおねえちゃんをみちびいた。

やがてふたりは、あのマンホールの台座を見つけた。

「ケンジ！」

穴からはいでた、おねえちゃんが、ぼくに駆け寄る。

ぼくは夢の中で、眠っているぼくの姿を見た。

「ケンジ、ケンジ！」

ゆさぶられながら、ぼくはぼくの中にもどつていった。ゆつくりと目をあけると、おねえちゃんが、必死な顔

でぼくをゆり動かしていた。

「おねえちゃん……。」

「よかった、生きてた。」

天音さんもマリキットに抱きついてた。

ところがどうしたことか、マリキットはハーモニカを吹きつつけるのをやめない。何かにとりつかれたように吹きつつけた。『家路』の曲は一段と大きくなり、ものさびしく懐かしいメロディが、ふたつの給水塔のまわりを、上へ上へと渦をまくようにのぼつていった。

「カウストゥバ」はあたりの地面を照らしたし、おねえちゃんのからだは全身がうすいみどり色の光りでおおわれた。

「マリキット！ どうしたのよ！」

曲をふき続けるマリキットを天音さんがゆさぶった。

彼女は気がつかなかっただろう。おねえちゃんからは宙に浮きだした。

おねえちゃんが、ゆつくりと上昇していくにつれ、給水塔の上の王冠型のかざりが光りだした。あとで知ったのだが、あれはもともと光るように電球がとりつけられているのだそう。電気も流してないのに、二基の黒い円柱の、はるか上の頭の部分が、幻想的に光り輝いている。

そして、夢の中でなつかしい人があらわれるように、暗がりの中から男の人があらわれた。ハギビスさんだった。

マリキットがハーモニカを吹くのをやめた。そのとたん、給水塔の光はすべて消え、街灯の明かりだけになった。

「あらしらしらしっ！」

さげび声を上げて、おねえちゃんのからだは落下していくのが見えた。木の中につつこんだから、たぶんだいたいようぶだ。

「レイコ。マリキット。」

ハギビスさんはゆつくりと近づいてきた。

天音さんは、ぼうぜんと父親を見つめている。

マリキットの顔が少しずつ、やがて力いっばいうごいた。

「うわああああああん……。」

表情をくずし、大きな声で泣き出したのだ。この子はちゃんと泣くことができるのだ。

ハギビスさんは、ふたりに駆け寄って抱きしめた。天音さんは泣いていたし、マリキットの声はあたりにひびきわたった。

おねえちゃんが腰をさすりさすりあらわれて、ハギビスさんに事情を聞いた。それによると、アパートに荷物を取りにきたら、なぜだかこつちに足がむかつたのだそう。その前にぼくらの家に電話を入れたが、月波久子は不在だといわれたらしい。

「なんだか、ごたごたしてたようだよ。」

「ハギビスさんは首をひねる。」

おねえちゃんが電話をかけたとき通じなかったのは、すでに友人といっしょに引越しをしたあとだったかららしい。友だちとともに川口のほうで仕事が見つかったのだそう。

「職場がアパートを世話してくれたんだ。」

ハギビスさんは、おねえちゃんにお礼をくりかえした。本当に申しわけないと頭を下げ、おねえちゃんは何度もハギビスさんをはげました。それを天音さんは、あたたかい、やさしげな目で見つめるのだった。

「とりあえず、ここから出ようよ。」

照れかくしだったのだろうか、おねえちゃんはそう提案した。ここは柵の中にあり、ハギビスさんもどこから入ってきたかよく覚えてないらしい。そう高い柵でもないので乗りこえるのは簡単だ。

桜が満開だった。街灯に照らされた夜桜の下で、ぼくらは別れることになった。

マリキットは、もとのように無愛想な顔になっていたが、小さな手をぼくにさしだした。ぼくはその手をにぎって握手した。

おねえちゃんと天音さんが、ぼくを見つめて、ほほえんだ。

「おわかれなんだね……。」

「おねえちゃんがつぶやいた。」

「チャコのこと、わすれないわ。」

「天音さんが、やさしくいった。」

「また会おう……。」

ふたりで同時に同じことをいいかけて、ふたりでくすりと笑った。

それから天音さんとおねえちゃんは、いつかケータイを持つことになったら、メルアドを交換することをちか

いあった。

「腹心の友だよ。」

「心の友よ。」

おねえちゃんはふざけて笑ったが、天音さんはおねえちゃんに抱きついた。

そして、おねえちゃんのほほに、そっとキスをして離れた。

おねえちゃんは、びつくりして何もいわずに天音さんを見つめていた。

いつまでも、いつまでも、おねえちゃんは見つめていた。

桜の花びらがおねえちゃんの頭につもるころ、三人は去っていった。あとには、おねえちゃんとぼくがとりのこされた。

「帰ろうか。」

おねえちゃんは桜を見あげた。

エピローグ

その夜、ぼくらが家に帰ると、おじいさんが寝こんでいた。

ぼくらが地下に落下したとき、あの部屋がどうなったのか疑問だったのだが、どうも、一瞬にしてドアが消えたらしいのだ。おじいさんも入国管理局の人たちもあつげにとられたが、結局、おじいさんの通報はデマだったということ。みんな引きあげて行った。

これらは、おじいさんの怒りとぐちをお母さんが聞いてあげて、それがパパに伝わって、パパがぼくらに話したことだから、どうもはつきりしない。

おじいさんはかなりおおげさに通報したらしい。犯罪者の外国人が何人もわが家に住みついていけると、管理局に訴えたのだ。

「父さんもボケがきたのかなあ。なんでそんなとつびな考えにとりつかれたんだろう？」

パパは老人問題について、真剣に考える必要が出てきたとなげいた。

それはそれとして、その日の夜、おそくまでどこで何をしていたのか、お母さんに追及された。

「ケンジ！ 小学生が夜おそくまで出歩いていいと思ってるの？ あなたはもうちよつとしっかりした子だと思っていたのに、チャコの影響かしら。どこに行っていたの。白状なさい！」

ぼくはことばにつまった。

おねえちゃんとぼくは、ならんでしかられていたのだが、お母さんは、もっぱらほこ先をぼくにむけた。夜遊びになれっこのおねえちゃんをしかけても、意味がないと考えたのだろう。でもこれは不公平だと思う。

「友だちの家で勉強して……。」

「友だち？ 友だちってだれ？」

「ええと、田中君……。」

「本当に？ 電話してたしかめてみるわ。」

「そ、それはやめたほうが……、もう夜おそいから、家の人、寝てるかもしれないよ……。」

ぼくはもう、しどろもどろだった。それをおねえちゃんは、にやにやと横目で見る。まったく不公平だ。

本当にウソはこりごりだ。二度とウソなんかつきたくないと思つたが、おねえちゃんはそうでもないらしい。

新学期が始まつてから、天音さんの取り巻きだった人をつかまえては、こんなことをいうのだ。

「ね、ね、レイコって、外国に行っちゃったみたいだよ。お父さんが貴族なんだって。大きなお屋敷からむかえが来て、お姫さまになったんだよ。」

「最後に会つたときはね、すっごい衣装を着てたよ。ゴージャスな毛皮でさ、宝石のついたティアラをつけてるの。幸せになったんだよ。レイコは。」

そういつて、おねえちゃんはよく笑う。

この話も、もう終わりだが、最後にあの、三軒茶屋のカレーショップの話をつけくわえておく。

なんでも不法滞在の外国人を何人もやとつていたとかで、通報されて店を閉めなくてはならなくなつてしまつたそう。ところが、一ヶ月もすると店は復活した。復活してからは以前より繁盛している。やはりあのカレーの味は、みんな大好きだったんだらう。

ぼくらは今でもあの店に行く。

そんな時、おねえちゃんは必ず、天音さんにもらつた、あの、うすも色のバグダラヤの指輪をつけて行く。テーブルにつくと、指輪を見ながら、ほんの少しやさしい顔になるのだ。

445

(C) 2007 Iinagawa. All rights reserved.